

漢文訓読史研究の一試論

小林芳規

第一節 意義・資料・方法

平安時代の訓点資料の解明の目的を、従来の如き国語史の空白ないしは欠陥を補うだけではなく、進んで訓読語そのものの究明に転ずる時、未解決の問題が幾つか存することに気付く。その中に、訓読語が変遷するか否か、変遷するとすれば、その事実の記述と相互間の因果関連や法則性の把握等、認識の意味付けがなされなければならぬ、という問題がある。

訓読語史が可能であろうという見通を、筆者は十年前の小論で立て(注1)、その後折毎に同性質の事象につき問題として来た(注2)、ここでは、平安初期と中期以降とで訓読語が異なること、その相違は具体的には、助字に対する辞の訓が詞の訓に変わったこと、読添語が減少したこと、傍訓の中にも平易な訓に変わったものがあること、副詞の呼応が一定語に統一整理されたことであると見た。本稿で新に提出しようとする仮説は、右と本質的には変わっていない。唯、断片的な事象だけでなく、できるだけ多くの訓読語について変遷の解明を志向し、共通の理法を見出そうと試みたものである。

本稿で採った方法は、同一の原漢文の文章を、時を隔てて、異人が異場所、で、訓読した二つの訓点資料の訓読語をそれぞれ比較し整

理する為方である。幸に訓点資料には、金光明最勝王経や妙法蓮華経、或いは弥勒経・四分律行事鈔・地藏十輪経などにおいて、平安初期の訓読語と、中期以後の訓読語とを伝える資料が何点か残っているから、二言語間の厳密な比較検討という基礎作業が可能である。かつ訓読者の素姓と訓読年月日や場所が判明し、各資料の訓読語の事情を知ることができるものがある。

この種の中から、先ず、本稿で対象とした訓点資料は、玄奘法師表啓平安初期点と、それから約二百年後に訓読した三蔵法師伝永久点とである。この資料を先ず取上げたのは次の理由による。

(1) 文章が四六駢儷体で変化に富み、助字類も多く、それらに加えられた訓点の詳細であること。

玄奘法師表啓(正しくは大唐三蔵玄奘法師表啓、以下略称に従う)は、玄奘三蔵が、唐の太宗と次代高宗とに上進した表九首と高宗が東宮であった時に上った啓四首と、その批答の勅書二首及びその他一首とを集録したもので、四六文で変化に富んでいる。その点で、他の多くの仏典の本文が梵文直訳体の漢文であるために難解な仏教専門語や字句の反覆が多く、文字面の変化に乏しく助字も限られているのと対蹠的である。平安初期訓点資料で右種の四六文は地藏十輪経序四十余行・沙門勝道歴山堂玄珠碑と本資料位である(注3)。そ

のうち前二者は量も少なく、共に実物を調査し得たが、「沙門勝道
歷山堂玄珠碑」の朱点は薄く難読で全文の解説文は難しい。これに
対して、玄奘法師表啓には巻初から第七表までの七首に、平安初期
の極めて周密な朱の訓点(仏典の付訓は一般に少いのが普通である)
が加えられていて、全文解説可能である。訓の詳細な態度は、例え
ば助字や副詞の訓を積極的につけていることでも窺われる。当時の
他の仏典資料にはこの種の助字に対する詳しい訓は容易に見出し難
いのである。

三藏法師伝(正しくは大慈恩寺三藏法師伝)は、法相宗学の基礎
を確立したといわれる玄奘三蔵が、西域・印度から数多の仏典等を
唐土に將來し翻經の大事業を成した、その伝記十巻で、巻六には、
第二表進西域記表、第四表太宗文皇帝報請作經序勅書、第五表謝太
宗文皇帝勅書表、第七表謝太宗文皇帝製三藏聖教序表と、第八表報
玄奘法師謝表勅書が含まれていて、彼の玄奘表啓と殆ど一致する。
興福寺本三藏法師伝巻六には永久四年(一一一六)の墨訓が加點さ
れていて、その訓は詳細で全文解説文が可能である。第八表は玄奘
法師表啓に訓点を付していないので、第二表・第四表・第五表・第七
表の四首が比較の対象となる。

(2) 加點事情が判明・又は推定できること。

玄奘法師表啓平安初期点は加點識語を欠くが、ア行・ヤ行のエの
区別のあること、上代仮名遣の残存しないこと、及び仮名字体等か
ら天安(八六〇)―元慶(八八二)頃とされる(注4)。又ヲコト点
の系統が中田博士の第三群点に属し、南都系教学の中で成立し後世
三論宗・真言宗所用の点であった(注5)こと、及び紙背の「華嚴八
会剛目章」は東大寺僧興頭が書写したものであるから、表啓の訓点

も東大寺の僧の手になるかとされ、本書の内容から見て、東大寺所
住の僧の中でも法相学に関係の深い人であったかとされている(注
6)。

三藏法師伝永久点は、巻六巻末に仮名と同じ墨筆で「永久四年二
月廿一日移点畢」とある。永久点は外に巻一後半・巻二・三・四・
五の五巻半に加點される。墨訓であるが、所々喜多院点らしい墨の
ヲコト点が残存する。本資料全般については、築島博士の詳細な調
査報告がある(注7)。それによれば、永久四年移点の原本の点本は
右の残存ヲコト点、古体仮名の残存から見ても、本文書写の延久三年
(一一〇七)以後、承保・承暦(一一〇七―一一〇八)頃のものか
とされる。

(3) 解説全文又は訓法所見が公表されていること。かつ百資料
とも親しく調査し得たこと。

所期の基礎作業を進める上に最も大切なことは、正確な解説文を
持つことである。玄奘法師表啓平安初期点については、既に五氏に
よる五つの解説文が公表されている(注8)。一訓点 料にこのよう
な多種の解説文が試みられたことは、他に未だ例がない。これは
本資料の国語史料としての価値の高いことを認められたためと思わ
れる。が同時に訓読史料としての価値も大きい。本資料は三藏法師
伝永久点と共に好資料として夙に大矢博士の沿革史料に紹介され
たものであるが、その後本資料の字音や訓法が訓読語考に引用さ
れたことは枚挙に遑ないほどである。茲にも昭和三十六年二月に調
査の機に恵まれて宿願を果し、今夏再び牧田晴彦先生、宅野淳彦師
の厚情により知恩院においてやや詳しく調査でき、諸先生の解説に
導かれて私なりの解説を為し、年来の疑問の幾つかを解くことも出

来た。

三蔵法師任永久点については、この資料全十卷の訓法について前掲実爲博士の調査報告がある。筆者も小松茂美博士の好意により、昭和三十三年冬調査することが出来た。(如上の二資料の解説文の全貌は、以下の論の前提として掲示すべく予定したのであるが、編輯等の都合で訂正した。)

右の二資料を対象にすることは、しかし一方に次の如き短所が考えられる。

(1) 二資料だけでは量が少ないこと。

(2) 三蔵法師任中の対象となつた卷六は永久点の加点であつたから、外の承德点等には原則として言及しなかつた。又三蔵法師任の訓点資料には本資料の他に、法隆寺本四卷(卷一・三・七・九、卷六欠)大治点、松本文三郎博士蔵本十卷承元四年点他が知られる(注9)。玄奘表啓と同じ箇所を含む卷六は承元点本にも存するらしく、その訓と永久点とを比較すべきであるが、筆者は承元点未見のためにそれが出来ていない。又卷六以外について永久点と、その箇所を法隆寺本大治点との訓詁を比較すると、全く一致するものがあり、更に平安中期以後成立の訓詁語(例えば再読字等)を共に持っているが、一方相互に異なるものも存し全同ではない(注10)。

右の短所については、(2)が他の訓点を交えず、平安初期点と永久点に限ることは一面資料の純粋性を保つことになる。(1)は量的には仏典の八巻とか十巻に比べると少ないが、しかし質的には助字も多く傍訓も豊富で、かなりその短所を覆っていると思われる。むしろ本稿における仮説を更に仏典のそれらについて検証する際に、その欠を補って行くことができると考えるのである。

玄奘法師表啓平安初期点の訓詁と、同じ文字面を持つ漢文に加えられた三蔵法師任永久点の訓詁とを比較すると、全く訓法を同じくする箇所と、訓法を異にする箇所とがある。例えば、

【平安初期点】①書を省て具に來意を悉く、法師夙高行を標して、スミヤカニ早に塵の表に出たり、宝の舟を泛てシテ而彼岸に登り、スミヤカニ妙道を搜てシテ而法門を闢り、弘大猷を闢て衆の罪を蕩

是の故に慈の雲カモヒ巻かむと欲るニに舒ヘテ而四空ニを

慧の日ツクシ得ル昏レれむとするニに明にしてシテ八極ニを照セりル舒ヘ明ニかなるハ其ノ其ノのハは誰れニ法師ナら

むヤ又云は新撰の西域の記をば者ニ当ル披覽ト

③沙門玄奘言す、蟠木西陵をば、雲官軒皇之ノ壤ト紀リ、流シ沙滄海をは夏載イ伊堯ノ之ノ域ト著リ、

【永久四年点】①書ヲ省テ具ニ來意ヲ悉ツ、法師夙高行ヲ標シテ早ニ塵表ヲ出タリ、宝舟ヲ泛テ而彼岸ニ登リ妙道ヲ搜テ而法門ヲ闢リ、弘大猷ヲ闢テ衆罪ヲ蕩滌ス、是ノ故ニ慈雲卷

トモノヲ朗ニシテ八極ヲ照セリ、舒明ナルニ者其、唯法師乎

②又云は新撰西域ノ記者當ル披覽ト

③沙門玄奘言、蟠木西陵ナリ雲官、軒皇ノ之ノ壤ニ紀、流シ沙滄海、夏載、伊堯ノ之ノ域ニ著リ

右の例文で、傍線の無い語句は全く同訓と見られる。一方、傍線を付した語句は両資料で訓法を異にしている。この訓法を異にするものを整理分類すると次の如くなる。

一、助字の訓法

助字(連立)は、「主として前置詞(於・干)・後置詞(之・者)・助動詞(令・使)・転接詞(而)・終詞(也・矣・邪・哉)等、一定の意義な唯実字を助けて語気の強弱緩急、節奏の抑揚疾徐を表すもので、国語のテニヲハに当るもの」(大漢和辞典)とし、実字に對する「虚字」(副詞・代名詞の訓をもつ)とは區別して考ふる。右の例文で言うと、「者」(之)「將」(欲)「當」等の如く、訓読に當つて平安初期点で不説であつたり、辭の訓であつた字、または古くそのような訓法を持つたと推測される字を指すことにする。これらの字の訓法に先ず異同が多い。

二、説添語

説添語とは、漢文にはその語に對應する文字がなく、訓読に當つて説添えられる単語を指すことにする。従来「補説語」ともいわれて来たが、「補説」は推説(原漢文にヲコト点・仮名のない際に、訓読文作成者が私意で補う語句)とも同義に用いられることもあるから、概念の混同を避けて「説添」の用語を用いた。説添語はその性質上、国語の助詞・助動詞・形式語など辭(古く「てにをは」といわれた語)に當る。右文例でいうと、「又」「り」「ヲバ」「イ」等である。これらに相違が見られる。

三、詞訓字

詞訓字というのは、実字及び虚字で平安初期点においても永久点においても、詞訓(自立語の訓)が与えられている漢字である。字音読の語も、日本語としては自立語に扱うから、この中に含める。この類には相違が少いが、それを類別すると次の如くである。

- (a) 平安初期点で和訓の字を永久点では字音とする。「湯トウ・瀦シユ」

を「湯トウ・瀦シユ」とする類。

- (b) 平安初期点の和訓を永久点で別の和訓とする。「搜ソウ・て」を「搜ソウ・テ」とする類。

- (c) 音韻の一部変更。「悉シツ・又」を「悉シツ・ツ」とする類。

四、副詞の呼応語

漢文の虚字を、国語の副詞に訓じた場合に、副詞の訓そのものは変更しないが、原漢文の意を国語に置換えるに當つて、副詞の訓に呼応して或いは説添え、或いは助字の辭訓として伴うものがある。この呼応関係にも平安初期点と永久点とで変更がある。「云はく」に呼応するに右例文では平安初期点に「と」を以つてしたが、永久点では全くこの語を欠いている、の類である。(異同そのものは説添語又は助字訓の問題であるが、副詞の訓をもつ虚字に關するので独立項とした。)

五、对句の訓法

構文上接統法の問題として、对句の上句の結びを平安初期点で終止形にする所を、永久点では中止の形にする類がある。「樹木ジュモク留段リウタン紀キ、流リウ沙シャ滄海ソウカイ著シヨクリ」(平安初期点)を「紀キ、著シヨクリ」(永久点)としているのが之である。

第二節 仮説のための作業

以下両資料の訓読語の相違の全例について、右の類別に従つて、各々を、同類の語で相違しない例と比較しつつ、整理し説明を試みる。(両資料の内、片方に該当漢字を欠くもの、及び漢字を異にするものが少数あるが、それは比較から省くことを原則とした)

第一項 助字の訓法

I 二資料で訓法を異にするもの。

訓法を互に異にする助字に二類がある。A平安初期点では不説であるが、永久点で一定訓を持つ助字。B平安初期点では辞の訓(助詞・助動詞・形式語。「形式語」とは説添語ともなりうる語で、「こと」「く」など形式用言・形式体言等をさす)であるが、永久点で詞の訓(自立語の訓)が固定した助字である。

A 平安初期点で不説の助字が、永久点で一定訓を持つもの。

平安初期点で不説の助字の中には、(a)その助字の意味に近い日本語を、その前後に説添えるものと、(b)その助字は不説で、しかも日本語の説添えもしないものがある。

(a) 前後に説添語を持つ不説字。

- 1 (可) (一ヘシ) 王舎之基オウカノナ 婆陁トアラヒ (可) 陟トボシ
- 2 (将) (一ヒ・ヒトナ) 反ヒガヒトナ 帝ミカド 京忽キョウコト (将) 二紀ニキ
- 3 (若) (一ヒトシ) 慧日ケイニチ (将) 昏クマ 玉タマ 字ジ 銀ギン 釣ツリ (将) 乾カン 坤コン 等トナリ 固コ
- 4 (如) (一ヒトシ) 總ソウ 享キョウ (如) 別ベツ
- 豈チ (如) 漢カン 開カイ 張チヤウ 掖エツ 近キン 接ケツ 金城キンシヤウ 秦シン 成セイ 桂林ケイリン

裁通サイツウ 珠浦シュウポ (而已)

5 (非) (一ナ)

(非) 乘ノリ 千葉チヤウエフ 詣キ 雙林シュウリン

6 (雖) (一トモ)

(雖) 勵リキ 愚誠ウシヤウ 慕ボ 異イ

7 (未) (一ナ)

班ハン 超チヤウ 俟タイ (而) 未ミ 遠エン

未ミ 有ユ 詮セン 序コ

百ヒャク 物モノ 正テイ 名ナ 末マツ 涉セツ 真マコト 如ニヒトシ 之シ 境ケイ

纏マキ 埃アヒ 累ライ 之シ 間マ 未ミ 出デ 寰ケン 区ク 之シ 表ヒヤウ

研思ケンシ 淹時エンジ 未ミ 能ネ 愆セン 壘レイ

8 (不) (一ナ)

(不) 垂シ 矜ケン 許コ 撫フ 射シャ

雲ウン 和ワ 広コウ 采サイ (不) 秘ヒ 響キョウ

(不) 足ソク 詮セン 其キ 理リ

9 (無) (一ナ) (名義抄「無、セズ」とあり)

(無) 任ニン 欣キン 荷カ 荷カ (之) 極キョク

10 (使) (一シセ)

遂スイ (使) 給園キツエン 精舎セイカ 並入ヘイニル 隄ツツミ 封トウ

庶シロ (使) 山サン 經キヤウ 閔ミン 彩サイ 汲キツ 伝デン 翰ハン 華カ

11 (而已) (のみ)

豈チ (如) 漢カン 開カイ 張チヤウ 掖エツ 近キン 接ケツ 金城キンシヤウ 秦シン 成セイ 桂林ケイリン 裁サイ

通(リ)カ(カ)ト(モ)シ(カ)ル(カ)ニ(ル) 珠浦(ニ)而已(シ)

方超(ニ)カ(ル)ナ(レ) 〔に〕(あ)れ 塵累(ト) 而已(シ) 〔已〕に 〔の〕点もあり

12

〔者〕一(ト)は

舒朗(シユ)朗(朗) 〔之〕(者)其(カ) 惟法師(カ) 〔乎〕

演(ノ) 其源(ハ) 〔者〕 法王(ナリ) (以下二例は第一表より補

う。永久点には欠く。)

千(チ)五(ハ)十(シ) 證(シ) 其道(カ) 〔者〕 聖帝(ナリ)

13

〔亦〕一(ト)も 〔亦〕 訓モ 小川本大乗堂珍論天曆九年点

銀言編玉字も 〔亦〕 浩(ハ)汗(ナリ) 〔於〕 南宮(ニ)

右の例文で、〔一〕に包んだ助字は訓読としては不読であり、漢文におけるその助字の意味は、訓読では辞の訓(ベシ・ム・ゴトシ・ズ・ノミ等)がその助字の前後の漢字に読添えられて生きている。

助字と読添語との関係は不安定で、助字は不読、読添語は単なる読添えに過ぎず、訓として固定したものではなかつたろうと考えられる。それは、第一に、助字には付訓がなく、読添語の表記の位置が固定せず離れていることで窺われる。表記の位置がずれたに過ぎないと思えるのは後世右の助字に訓が固定したそれに馴れた目から見ての錯覚である。右の表記は広く平安初期の訓法として、他資料にも見られるものである(後述)。それは恰も、

已(ニ)英(テ)た(ル)こと(を) 曩(ノ)代(ニ)飛(バ)シ

往(リ)に 振錫(ニ)因(リ)て 聊(カ)に 烟(ノ)山(ニ)詔(ヘ)マツリ乎(シ)。

において「たる」「キ」が「已」「往」の字義によって読添えられた如くである。唯違う点は「已」「往」には「スデニ」「サキニ」の副詞の訓が別に与えられているのに対して、かれには「未イマダ」以

外は) 訓がなく不読とされていることである。第二に、漢文の助字を含む文を、各個の文毎に個性的にかつ日本語として自然な文章に近づけて訓読すれば、同一助字を含む漢文も、個別的に種々の異なった読添語(その性質上日本語の辞の訓が採られる)が考案されることになる。平安初期の訓読にはこの特徴が窺われる。右例で、「將」字の含まれる文を「マク」「むとする」「む」と読添えたのはその例である。後世のように、「將」字に「マサニ：ムトス」の訓を固定させ、「將」字は必ず一様にそう訓ずるのでは、個性的訓法と国語の自然さとは失なわれる。そうでない為には、読添語が助字の訓としては固定せず、各々別々であることが要件である。

さて、右と同じ漢文を永久点では次の如く訓読している。(永久点には一部分欠けた所がある。平安初期点に該当する文例がないのはそのためである。)

〔將〕(マサニ：ムトス)

惠日將(シ) 昏(シ) (この箇所、再読か否か不明。永久点の他箇所では次の如く再読としているのに従う。)

○玄奘讀(シ)此(ノ)言(ヲ)將(シ) 誡(シ) 中(ノ)庸(ニ)

○法師在(リ) 長安(ニ) 將(シ) 究(ム) 志(ヲ) 西方(ニ)

○山高(ク) 風急(ク) 鳥將(シ) 度(ス) 者皆不得飛(ズ)

○山高(ク) 風急(ク) 鳥將(シ) 度(ス) 者皆不得飛(ズ)

○山高(ク) 風急(ク) 鳥將(シ) 度(ス) 者皆不得飛(ズ)

(如) (ゴトシ)

繕写如(ク) 別(ニ)

豈如(ク) 漢(ノ) 開(ク) 張(ク) 掖(ク) 近(ク) 接(ク) 金城(ニ) 秦(ノ) 戍(ニ) 桂林(ニ) 纒(ク) 通(ク) 珠浦(ニ)

而一已（アラス）

〔非〕

匪（アラス） 乘（アラス） 千葉詣（アラス） 雙林（アラス）（他例が次例の如く、一樣に「アラズ」とあるに従う）

○非 聖藻 何以序其源

〔雖〕

雖（イヘドモ） 勵（イヘドモ） 愚誠 慕異（イヘドモ）（他例「イヘドモ」とあるに従う）

〔未〕

未（イマダ） 超候（イマダ） 而未遠（イマダ）（他例再読としているのによる）

未（イマダ） 有鈴序

百物正（イマダ） 名未涉真如之境

〔不〕

不垂矜（イマダ） 許撫躬

雲（イマダ） 和広一窠不秘響（イマダ） 於龔味（イマダ）

不足銓（イマダ） 其理

〔無〕

無（イマダ） 任（イマダ） 欣荷之極（イマダ）

〔使〕

遂使（イマダ） 給園精舍並入提封（イマダ）

〔而已〕

豈如（イマダ） 漢開張掖近接金城秦成桂林纒通（イマダ）

珠浦而一已（イマダ）

方超塵累（イマダ） 而一已（イマダ）

cf. 津液（イマダ） 而已（イマダ）（卷二）

〔者〕

舒朗（イマダ） 之（イマダ） 者其唯法師乎（イマダ）

ここでは助字にまでも、一定の訓が固着しようとする傾向の二の姿を、二百年後の永久点が示している。

(b) 前後に読添語の無い不読字

〔以〕

徒（イマダ） 以上（イマダ） 假皇（イマダ） 靈下（イマダ） 資（イマダ） 嬪命（イマダ）

cf. 当服（イマダ） 以降（イマダ） 煩惱之魔（イマダ） 佩（イマダ） 以断（イマダ） 塵勞之納（イマダ）（第六表より補。永久点には欠く）

〔之〕

慈雲欲（イマダ） 卷（イマダ） 舒（イマダ） 之（イマダ） 蔭（イマダ） 四空（イマダ）

慧日（イマダ） 将（イマダ） 昏（イマダ） 明（イマダ） 之（イマダ） 照（イマダ） 八極（イマダ）

（右二例点を欠くので他例によって推す。cf. 並已載（イマダ））

〔之〕素象還猷（イマダ） 紫震（イマダ）〔七表〕。この文、永久点では、

〔之〕を〔於〕に作る。

右を永久点では「以」之と訓じている。

〔以〕徒以馮（イマダ） 假皇（イマダ） 靈（イマダ） 飄身進影（イマダ）

〔之〕慈雲欲（イマダ） 卷（イマダ） 舒之蔭（イマダ） 四空（イマダ）

惠日将（イマダ） 昏明之照（イマダ） 八極（イマダ）

B 平安初期点では辞の訓であるが、永久点で詞の訓を持つ助字。

〔欲〕(二)

慈雲欲（慈雲の欲） 卷（巻） 舒（舒） 〔之〕 蔭（蔭） 四空（四空）

平安初期点では「ムトス」に当て「將」の平安初期訓法と同義に訓ずるが、永久点では「ホツス」と訓ずるらしい。

慈雲欲（慈雲の欲） 卷（巻） 舒（舒） 之（之） 蔭（蔭） 四空（四空）

〔永久点の他例〕意復不欲居（意復不欲居） 大乘（大乘） 寺（寺） 等により、右例は「ホツ」の省記と見られる。

〔非〕(三)

張（張） 寤望（寤望） 〔而〕非博（非博）

平安初期点には別に「非」乗らずして「も」もあった。この語は永久点では一様に「アラズ」とする。次の例は加点を欠くがそう訓じたものと考えられる。

張（張） 寤望（寤望） 〔而〕非博（非博）

II 二資料で訓法が同じ助字

訓法が同じ助字には、A共に不読のもの、B共に一定の訓（詞の訓）を持つものがある。

A 共に不読の助字（印の上が平安初期点、下が永久点）

共に不読の助字の中には、その助字の意味に近い日本語（主として辞の訓）を、その前後に読添えるが、(a)その読添の辞が同じものと、(b)読添の辞が異なるものとがある。

(a) 読添の辞が同じ不読字

〔於〕

〔於〕七徳に——〔於〕七徳ニ

〔於〕十倫に——〔於〕十倫ニ

〔於〕貝闕に——〔於〕貝闕ニ

〔於〕玉掬に——〔於〕玉掬ニ

〔於〕生滅之場に——〔於〕生滅之場ニ

〔於〕愚ナル誓に——〔於〕愚誓ニ

〔於〕戸の牖に——〔於〕戸牖ニ

〔於〕巖（巖）の涯（涯）に——〔於〕巖涯ニ

〔於〕聲の味（味）に——〔於〕聲味ニ

〔而〕

溷（溷）ミテ〔而〕——溷（溷）ニテ〔而〕

苑（苑）トシテ〔而〕——苑（苑）ニシテ〔而〕

泛（泛）ヒテ〔而〕——泛（泛）テ〔而〕

下（下）シテ〔而〕——下（下）テ〔而〕

泛（泛）ヘテ〔而〕——泛（泛）テ〔而〕

搜（搜）クテ〔而〕——搜（搜）リテ〔而〕

持（持）ミテ〔而〕——持（持）テ〔而〕

掩（掩）ヒテ〔而〕——掩（掩）テ〔而〕

配（配）ヒテ〔而〕——配（配）シテ〔而〕

梯（梯）を〔して〕〔而〕——梯（梯）シテ〔而〕

威（威）〔まり〕シメテ〔而〕——威（威）テ〔而〕

假（假）テ〔而〕——假（假）テ〔而〕

覆（覆）シテ〔而〕——覆（覆）シテ〔而〕

假（假）テ〔而〕——假（假）テ〔而〕

〔与に而て——与ににして〕〔而〕。上の「而て」は「与にして

〔而〕」の誤点か。前掲例に対して唯一の例外)

〔以〕（接続用法）

馮（馮）みて〔以〕——馮（馮）リテ〔以〕 跨（跨）ムて〔以〕——跨（跨）テ〔以〕

〔重て以て——重テ〔以〕。上の「以て」の「て」は誤点か。

前例および永久点の不読から見て例外)

〔之〕（文中の用法）（他に例多し）

竜（竜）宮（宮）の〔之〕儲（儲）へたる所を——竜宮（宮）の〔之〕所儲（儲）ヲ

生滅（の）の〔之〕場に——生滅（の）の〔之〕場ニ

刑措の(之)君に——刑措の(之)君ニ

望(ま)クは(之)——望(む)ニ班(之)

舒(へ)明(かなるは)之(之)者——舒(明)之(之)者

(cf. 載之素象——載於白馬)

〔者〕

西(域)の記を(者)——西(域)の(記)者

〔則〕

然れ(は)〔則〕——然ハ〔則〕

(b) 読添の辞が異なる不読字

〔而〕

俟チシモ〔而〕——候レドモ〔而〕

望(み)シモ〔而〕——望(め)ドモ〔而〕

〔矣〕

惟(れ)法師なりヤ〔乎〕——唯、法師〔乎〕(注13)

B 共に一定の訓(詞の訓)を持つ助字

〔以(モチテ)〕(前置詞用法)

微(生)を以て——微生ヲ以テ

飭(ル)に左言を以てセム——飭(ル)ニ左言ヲ以てセム

何を以て(か)——何(ヲ)以(テ)カ

〔所(トコロ)〕

聞(く)所(履)む所——聞(く)所(反点あり)、履(む)所(返点あり)

章(衣)之踐(み)藉(シ)所——章(衣)之踐(み)藉(する)所(反点あり)

夸(父)之凌(き)厲(シ)所——夸(父)之凌(き)厲(する)所

(反点あり)

己か聞(け)る所(に)は非(ず)——己か聞(く)所(に)非(ず)

〔非(アラズ)〕

聞(る)所(に)は非(ず)——聞(く)所(に)非(ず)

神(恩)に非(ハ)——神(恩)に(に)非(ハ)

聖(藻)に非(ハ)——聖(藻)ニ非(ハ)

〔無(ナシ)〕

述(こと)無(し)——述(コト)無(し)

〔如(ヨトシ)〕〔譬(ヨトシ)〕

食(項)の如(し)——食(項)ノ如(し)

聞(ケル)か如(し)——聞(く)カ如(し)

蝨(の)むシノ譬(トシ)——秋(蝨)ノ譬(トシ)

以上助字の訓法について、平安初期点と永久点とを比較すると、

大体一定の傾向が見てとられる。即ち、

(一) 平安初期点で辞の訓であった助字は、永久点では詞の訓になる。

(例) 欲(ス)トホツス 非(ズ)トアラズ

(二) 平安初期点で不読の助字は、

(イ) 永久点でもそのまま不読のものがある。

(例) 〔於(ニ)〕〔而(ニ)〕〔以(テ)〕〔接統法〕〔之(之)〕〔文中〕〔者〕〔則〕

(ロ) 永久点で変わったものは、必ず一定訓を持つ。その訓は、平安初

期点で当該不読助字と同字に、別に幾つかの訓が在って、その

中に詞の訓があれば、永久点ではその詞の訓に固定している。

(例) 〔非(ズ)〕〔非(ズ)〕〔非(ズ)〕〔非(ズ)〕

(印は用例後持、注14)

〔非(ズ)〕〔非(ズ)〕〔非(ズ)〕

〔無〕…ス・無→無

〔雖〕…トモ・雖・雖→雖

〔以〕…ヲ・以→以

〔之〕…ノ・之(の訓)→之(助字の訓にも)

〔者〕…者→者

〔亦〕…亦→亦

〔而已〕…而已→而已

〔存疑〕如…如→如

〔可〕…可(可)→可

〔不〕…不(不)→不

〔將〕「未」「使」等後世再読訓となるものは後述。

〔平〕平安初期点で既に詞の訓を持つ助字は永久点でも同じその詞の訓である。

〔例〕以(前置詞)→以

所→所 無→無

非→非 非→非

以上の三点に共通して見てとられる傾向は、「辞の訓」が「詞の訓」に固定する動きである。その根柢に存するものは、漢字一字に一定訓を固定しようとする事、それを助字にまで進めようとした結果であろうと思ふ。

〔補〕

右は玄奘法師表啓平安初期点とそれと共通する漢文を持つ三蔵法師伝永久点の助字について見たものであるが、両資料の他の部分を

はじめ、広く他資料に及べば、更に同性質の事例が挙げられる。(ここではその目録のみであつて検証については別稿を期したい)

○(一)の補充例
及

〔ト〕 小大无量作(及)不作 善悪無記の品類の中に(地藏十輪経元度点)

〔オヨビ〕 吕后最怨歳夫人及其子趙王(史記吕后本紀延久五年(一〇七三)点)

○(二)の補充例
1 勿ナ・ジ・ザル・ナシ・ナカレ→ナカレ
〔ナ〕 汝憂戚すること勿(西大寺本金光明最勝王経古点)
〔ジ〕 今よりは(勿)復此(の)刹帝利の旃荼羅等并て其の所居の国土城邑を擁護セジトイハム(十輪経元度点)
〔ザル〕 外道の凡夫は若し七惡有(ら)ムには為に説(か)勿ル 応シ(法華経玄賛古点)
〔ナシ〕 薬性違(ふ)こと勿ことを識リキ(十輪経元度点)
〔ナカレ〕 惡趣には墮(つること)勿(ト)思惟す(十輪経元度点)
〔ナカレ〕 勿(恢)勿(恢)由(此)稍(安)三蔵法師伝永久点
2 已ヌ・タリ・リ・ヲハル→ヲハル
〔ヌ〕 奉(授)世尊(世尊)受(已) 已(西大寺本最勝王経古点)
〔タリ〕 歡喜(受)レ分(已)有(三)客比丘来(岩淵本願経四分律平安初期点。大坪博士による)
〔リ〕 時(に)五比丘(略)頭面(礼)足(却)住(一)面(已) (小川本願経四分律平安初期古点。大坪博士による)

〔ヲハル〕 既識病源已隨病（西大寺本最勝王經古点）

〔ヲハル〕 菩薩入明了已（求聞持法苑和頃点）

已（觀智院本名義抄）

3 欲ス・オモフ・オモホス（注15）・ネガフ・ホラス・オモフ（オボス）

〔オモフ〕 我欲破汝異（百論天安二年十占）

〔ホラス〕 呂鹿欲為不善（史記孝文本紀延久点）

〔オモフ〕 若欲自隱（不空爾索神呪經竟德点）

4 為ニ・タメニ・タメ

〔三〕 一切諸法無有レ不（為慈悲所撰） （西大寺本）

金光明最勝王經古点

〔タメニ〕 我今為是啓問（如来） （心地觀經院政期点）

為諸煩惱之所策役（同右）

5 於ニ・ニシテ・ウヘニ（注16）・アリテ・オキテ・オイト

〔三〕 更取小床（於）一面坐（岩淵本願經四分律古点）

〔ニシテ〕 則（於）欲界受報（成実論天長五年点）

〔ウヘニ〕 於十方界（或時）現（十輪經元慶七年点）

〔ウヘニ〕 故先於六根永断諸貪欲（同右）

〔アリテ〕 於无相施不能堪樂（金剛般若經讚述仁和）

一点。大坪博士による

〔オキテ〕 於二六時中（孟冬）枯悴（弥勒上生經贊朱点）

〔ニオイト〕 於自身墮（仏乘院藏三密淺深隨聞記康和点）

○上の中の存疑について
「コトシ」は体言ナシが語源とされ、今日でもこの語を辞に扱わ

ない立場もある程で訓読的性格も考えられる。

「ベシ」「ヌ」は後世も「不」「可」の訓として用いられる、従って辞訓の詞訓化例としては例外になる。しかし、後世形式用言

「アリ」を取入れた「ベクアリ」「ベカリ」「ズアリ」「ザリ」「ザル」「ザレ」形が多く用いられ、特に後者では連体形・已然形・命令形にこの「アリ」の融合形を用い、「又」「ネ」を避けたのは、やはり右の傾向の一形式と見られないか。

○再読字について

再読字というのは、

未（未）到（彼） 所（已）来（勿）懷（瞋） 嫉（嫉）

（蘇悉地羯羅經延喜九年九〇九点）

当用（赤） 粳米（飯） 根菜密水及（蜜） 砂糖（米粉） 餅等（是）

〔也〕 （同右）

王須（避） 之（法華義疏長保四年一〇〇二点）

〔未〕 又未曾見不善業（二） 大利益（成実論天長点）

〔未〕 又未曾見不善業（二） 大利益（成実論天長点）

〔未〕 又未曾見不善業（二） 大利益（成実論天長点）

〔未〕 又未曾見不善業（二） 大利益（成実論天長点）

〔未〕 又未曾見不善業（二） 大利益（成実論天長点）

〔未〕 又未曾見不善業（二） 大利益（成実論天長点）

〔未〕 又未曾見不善業（二） 大利益（成実論天長点）

〔未〕 又未曾見不善業（二） 大利益（成実論天長点）

〔未〕 又未曾見不善業（二） 大利益（成実論天長点）

〔未〕 又未曾見不善業（二） 大利益（成実論天長点）

〔未〕 又未曾見不善業（二） 大利益（成実論天長点）

〔未〕 又未曾見不善業（二） 大利益（成実論天長点）

〔未〕 又未曾見不善業（二） 大利益（成実論天長点）

〔當〕 當知此經亦至其國 (西大寺本最勝王經古点)

〔將〕 身形羸瘦將死不久 (同右)

〔須〕 皆須等分和一処 (同右)

又は、副詞の訓を直ちに當てる。

〔未〕 班超俟 (而未) 遠 (玄奘法師表啓平安初期点)

〔當〕 當得 (不) 退阿耨多羅三藐三菩提 (西大寺本最勝王經古点)

〔將〕 大士親如斯其恐將食子 (同右)

〔須〕 若犯過之比丘 (須) 治 (者) 一日兩日苦 (四分律行事鈔平安初期点)

後者では、文意に應じて、助動詞等の辞の訓を説添えたり、平叙したり命令形にしたりする。

〔當〕 我当以不善 (而) 死 (成実論天長五年点)

〔當〕 當為汝略說少分 (十輪經元慶七年点)

〔持經者〕 當獲 (無辺殊勝之) 福 (西大寺本最勝王經古点)

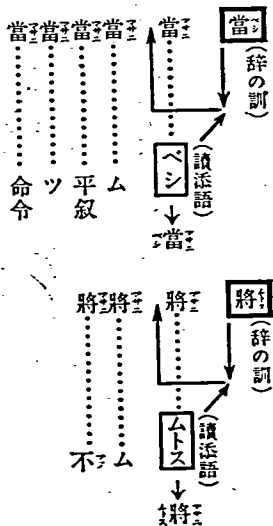
新撰西域記 (者) 當自披覽 (玄奘法師表啓平安初期点)

〔謹當服〕 (以) 降煩惱之魔 (以) 斷塵勞之結 (同右)

〔將〕 則命盡 (不得修) 道 (將死) 時 (成実論天長点)

趣 死將不久 (西大寺本最勝王經古点)

説添の助動詞の中には、別に「辞の訓」に當てた「ず」「べし」「む」とす「べし」が必ず存することは注意すべきで、副詞の訓と説添の中のその「ず」「べし」「む」とす「べし」との呼応はより密である。平安初期点と永久点とを比較すると、副詞の訓は殆ど變つていない(第三項詞訓字参照)。恐らく平安初期も中期以降も副詞の訓は一般に變遷しなかつたであろう。再説字の一訓である副詞の訓も同様であつた。變つたのは他の一訓である辞の訓の方で、単に辞だけで訓説される例は中期以降には一般に見られなくなり、同時に再説訓が現われる。「未」「當」「將」「須」の辞の訓が消滅するに際してそれが別に同字を副詞に訓じた際に密接な呼応関係にあつた「未」「當」「將」「須」「將」「將」「須」「須」の説添語と同じ辞である所から、両訓法が一緒になつて、「未」「當」「將」「須」の如き再説訓が成立したものと考える。図示すると、



となろう。さすれば再読訓の成立も亦、他の助字の訓の変改と揆を一にして辞訓の詞訓化に起因する現象と見られる。前掲例の「未」
「將」^ト「當」における平安初期点の非再読訓から永久点の再読訓への
変改は右の如き事情が背景にあると考えられるのである。

如上の辞訓の詞訓化は、一時期を画して一樣に成ったものではない。
無論、再読字や(イ)の「欲ス」「及ビ」は平安中期以降において、
初めてその例を見る。しかし(ロ)の助字の様に既に平安初期に辞の
訓の外に詞の訓も存するものもある。その詞訓も字によつては更に
消れば辞訓だけであつた可能性がある。

非アラズト

以モチテテ・ニテ・ヲ

雖イヘドモトモ

所トコロ↑(ル・ス・ニ)

例えば、万葉集では「雖」を単に「トモ」「ドモ」にのみ当て、「勿」
は「ナ」に、「將」は単に「ム」に、助字としての「所」は「ス」
「ユ」「ル」に、「於」を「ニ」「ウヘ」もある」と訓じている。

助字が詞訓の安定した固定訓をとることは、後世も引続き行われ
た。次のような訓を後世の資料に見るのは、やはり同じ動きと考え
られる。

実^{ミコト}不^ス虚^ニ (三藏法師伝永久点)

不^ス弗^ス令^シ使^{シム}遣^ス所^{ナリ} (観智院本名義抄)

浮^ハ雲^ハ自^ラ後^{シテ}寒^シ 応^シ暖^ム (梅沢本新撰朗詠集)

以^{コト}コレ^ニヲ 与^フ (観智院本名義抄)

仍^テ開^キ安^ラ樂^シ行^ハ為^シ始^メ行^ハ方法^ヲ 所以^ニ此^ノ品^ヲ来^ル

(法華廿八品略釈延久二年点)

第二項 読添語

I 二資料で異なるもの

二資料間で読添語に変更があるものに三類が存する。A平安初期
点では読添語があるが、同箇所漢文に永久点ではその読添語を欠
くもの。B平安初期点で用いた読添語と、同箇所永久点で用いた
読添語とが異なるもの。C「A」と反対に、永久点に読添語を存す
るもの、である。

A 永久点では読添語を欠くもの。

永久点で欠けている読添語には、(a)平安初期点にのみ見られる読
添語と、(b)永久点の他の部分には読添えられているが、その箇所
は偶々用いない読添語とがある。

(a) 平安初期点特有の読添語

「い」

1 雲官^イ軒^イ皇^イ之^イ境^イと紀^イセリ

2 流^イ沙^イ滄^イ海^イを^イは^イ夏^イ載^イ伊^イ堯^イ之^イ域^イと著^イセリ

3 玄^イ奘^イ聞^イク

4 時^イ序^イ推^イ選^イたり

指示強調の意の副助詞「い」は平安初期点では右の四例がある。永
久点では次のようにその箇所に助詞を用いていない。「い」は永久
点を通じて全く見られない。

1 雲官^イ軒^イ皇^イ之^イ境^イニ^イ紀^イシ

2 流^イ沙^イ滄^イ海^イ 夏^イ載^イ伊^イ堯^イ之^イ域^イニ^イ著^イセリ

3 玄^イ奘^イ聞^イク

4 時^イ序^イ推^イ選^イ(り)タリ

「し」

1 物に在(す)るす(ら)猶し迷ヒヌ、況や(下略)

2 猶し且た速ク義一冊を徴シ(く)して

3 玄奘、業、尚し空(レ)ク疎(に)して

cf. 他の部分にも「猶し」二例、「尚し」一例あり、すべて「し」を読添える。又、次の如き例もある。

何の以てか仰て天ノ規をシ稱して敬(み)て至教を弘(ほ)ム

永久点では「し」を欠く。

1 物ニ在テ猶 迷ヌ、況(や)仏教幽微ナリ (下略)

2 猶 且ク 速ク義冊ヲ徴シ

3 玄奘業行 (「猶」の誤写か) 空(し)ク疎ニシテ

「(ま)くのふみ」

反ニ 帝京ニ忽(に)將(に)一紀(を)ニ

平安初期点の読添語「クノミ」は、平安初期特有のもので、中期以降は読添としては用いられない。「而已」「耳」の訓に固定する。

永久点ではここは本文を異にする。

返ニ 帝京ニ淹(ト) 逾(ト)一紀(ト)

「まじる」

1 聊(か)に岨(山)に謁(マ)ハツツリキ

2 雙(一)林(に)詣(ヒ)マツルこと食(一)項(の)如(し)

平安初期点の謙讓の読添語「マツル」は平安初期特有のもので、中期以降は、読添語としては用いない。右は永久点では次の如く敬語を欠いている。

1 聊(か)ニ岨(山)ニ謁(セ)リ

2 雙林ニ詣(ル)コト食項ノ如(シ)

(b) 永久点の他所には用いるが、その箇所読添語を欠くもの。

(イ) 助詞

係助詞「は」「も」を平安初期点で読添える所を永久点では読添えない例が多い。

「は」

1 東(一)夷(ハ)楛(ノ)矢(を)刑措(フ)之(レ)君(に)賄(リ)キ

2 理(ハ)聚(ル)象(を)苞(ネ)

3 詞(ハ)感(英)を逸(カ)マ(ノ)ニス

4 武(一)経(を)ハ(於)七(レ)德(に)曜(ラ)シ

5 文(一)教(を)ハ(於)十(レ)倫(に)關(ル)ク

6 既に暉(光)ニ暉(カ)をハ(於)戸(ノ)牖(に)分(テ)リ

7 鷄(一)園(ノ)與(典)なるハ英(詞)に託(シ)テ(而)宣(ト)暢(フ)

8 化(ハ)蕭(草)を鑑(セ)リ

9 塵(一)灰(ハ)方(一)輿(に)溷(ミ)

10 章(一)衣(ノ)之(レ)踐(み)藉(シ)所(ハ)広(一)表(を)陳(フ)ル(レ)こと空(シ)

11 夸(一)父(之)凌(キ)厲(リ)シ所(ハ)土(一)風(を)も迷(フ)ル(レ)こと無し

12 才(ハ)馬(鳴)に異(ニ)シテ深(ク)瀉(瓶)の(レ)敏(イ)こと愧(チ)

(ウ)

13 文(ハ)象(一)繫(ノ)之(レ)表(を)超(テ)若(ク)聚(ル)日(ノ)千(ノ)光(を)放(テ)ル(カ)こと(シ)

14 理(ハ)衆(妙)の(レ)門(を)括(ル)こと法(雲)の(レ)百(一)草(を)濡(ホ)ス

ことに同し

15 己か既(け)る所(に)に非(ず)

【も】

1 雲_一和の広き桑_一も響を〔於〕響の味に秘サ不

2 金_一壁の新(し)き珍も

3 土_一風(を)も述_フ(る)こと無し

右の「は」「も」は永久点では読添えない。

【に】

1 東_一夷 楛_ヲノ矢、刑措_ノ之君ニ奉ス

2 理、繫象ヲ包ネ

3 謂、感英ニ逸(れ)タリ

4 武経ヲ〔於〕七_一徳に曜ラシ

5 文教ヲ〔於〕十_一倫ニ闡ク

6 既に暉ヲ〔於〕戸_一牖ニ分ツ

7 鶏_一園與典英詞ニ託テ〔而〕宣暢セム

8 化、簫草ニ霑リ

9 蘆ノ灰 方輿ヲ溼ミテ

10 章_一衣之踐藉(する)所 空(し)ク広表ヲ陳シ

11 夸_外、父_カ之凌厲(する)所 土_一風ヲ述(ふる)コト無し

12 才馬鳴ニ異ナリ 深く瀉瓶之敏ニ愧ツ

13 文 象繫之表ニ超(え)

14 理 衆妙之門ヲ括レリ

15 己か聞(く)所ニ非(ず)

【も】

1 雲_一和 広_一桑 響ヲ〔於〕響味ニ秘サ不
2 金_一壁 奇珍

3 土_一風ヲ述(ふる)コト無し

副助詞「すら」を平安初期点で読添える箇所を、永久点では欠く。

物ニ在(ず)るす(ら) (注17) 猶し迷ヒ又、況や仏教の(下略)

永久点では読添えない。

物ニ在テ猶迷ヌ、況や仏教 幽微ナリ (下略)

平安初期点で格助詞「を」の読添例。

【を】

1 白_一雲を〔於〕玉_一檢に霑ハセリ

2 貝_一葉の靈文を成クに冊_一府に帰セリ(て)

3 楛_ノの矢を刑措_ノの(之)君に贈_リキ

4 滄_一海をば夏_一載い伊_一堯之域と著_シセリ

5 赤_一坂に梯_一を(して)〔而〕朔_一を承_テ

6 阜_一靈を馮_ミテ〔以〕遠(き)を征_キ

7 伏(して)皇_一帝陛下を惟(みれば)紀_一を握_リテ

8 伏(して)皇_一帝陛下を惟(みれば)は、玉_一臺質を降して

9 新撰の西域の記を〔著〕者_一当に自_一披覽_ヨ(みよ)と

永久点では読添えない。

【を】

1 白_一雲 〔於〕玉_一檢ニ霑ハス

2 貝_一葉 靈文咸ニ冊_一府ニ帰ス

3 楛_ノノ矢、刑措_ノ之君ニ奉ス

4 滄海、夏載、伊堯之域ニ着セリ
 5 赤坂ニ梯カハシシテ而朔ヲ承ツ
 6 皇靈ニ馮リテ以遠ク征ク
 7 伏惟みれハ、陛下、握リ紀
 8 伏惟みれハ、皇帝陛下、玉嘉質ヲ降シ
 9 新撰西域の記者当ニ自レ披レ覽ル當シ
 平安初期点の詠添語の助詞「が」「の」を永久点で欠く例がある。

「が」

- 1 張カ竊カ望シ望シも而博カから非キ
- 2 班ハ超カ俟チシも而未マ遠クアラす

「の」

- 1 金カ壁ノ奇シ奇シも奇珍モ
 - 2 仏ツ教ノ幽カニ微シ微シもをば
 - 3 雲ノ和ノ広ク楽モ
 - 4 大唐ノ西ノ域ノ記
 - 5 新撰ノ西ノ域ノ記をば者
 - 6 貝葉ノ靈文を
 - 7 給園ノ精舎
 - 8 井ノ浪ノ華
 - 9 衆ノ罪、宝ノ舟、聲ノ味ノ味ノに、塵ノ表、朝ノ露
 秋ノ蝨、慈ノ雲、戸ノ牖、恩ノ榮、天ノ廊下
- 永久点では次の如くである。

「が」

- 1 張カ竊カ望シ望シも而博カ口ノきニ非ス

「の」

- 2 班ハ超カ俟レトモ而未マ遠
- 1 金カ壁、奇シ珍
- 2 仏ツ教、幽カ微ナリ
- 3 雲ノ和、広ク楽
- 4 大唐ノ西域ノ記ト
- 5 新撰ノ西域ノ記者
- 6 貝葉、靈文
- 7 給園、精舎
- 8 浪ノ井、花
- 9 衆ノ罪、宝舟、主反、聲味、塵表、朝露、秋蝨、慈雲、戸牖、恩榮
 天廊

「が」の二例と「の」の1-2は、平安初期点で従属文の連体形止用言に應ずる主語に訓読したもの、永久点では終止形止又は接続助詞に應ずる主語に訓読して、主語を示す助詞は詠添えず語序に委ねている。3以下の「の」も連体格を永久点では語序に委ねて詠添語がない。9は永久点では字音語の熟語としている。

平安初期点で、「て」「して」を詠添えた所を、永久点で欠く例。但し、永久点では「降シて」「の如くに」「テ」を落したとも見られる。

(四) 助動詞

- 1 玉カ嘉質ヲ降シて金ノ輪天、塵ヲ御下
- 2 衆ノ罪、圓ニして班ヲ駟ケ、右ニ例平安初期点
- 1 玉カ嘉質ヲ降シ、金輪天塵ニ御ス
- 2 衆ノ罪、班ニ駟レ、右ニ例永久点

平安初期点における「き」「たり」「つ」「ぬ」「り」の読添例。

「き」

- 1 西光羌カウハ白ヒき環ヒツを垂ヒ衣ヒ之君ニ薦セリリキ
- 2 東ト夷ヒは楛コの矢を刑措ケの之君に贈テリキ
- 3 夸カ父フ之ノ凌シ腐シ所トハ
- 4 経ノ題ノ為ニ請ヒシハ
- 5 張シ齋カ望ミシモ博シ非キ
- 6 班ト超カ俟チシモ而シ未カ遠クアラず

「たり」

- 1 衡ヲ提ヒテ物ニ範スリタリ
- 2 積ト氷ヲ照ラシメ使メタリ
- 3 心ヲ梵ノ境ニ冥ヘタリ
- 4 章ノ宮ノ之ノ儲ヘタル所ヲ
- 5 精シキ守リ振リ越ケタリ
- 6 歳ヲ積リタルレトモ
- 7 已ニ英テタルコトをシ異伐に飛ハシ

「つ」

- 1 鬪ヲ資ノ孤ノ獨ヲは還リて奠実に稽ヘツ
- 2 躬ヲ撫テ息ヲ累ヘて凶を失ヒツ

「ぬ」

- 1 其ノ義ナルことニ帰シヌ
- 2 尋メ求メ歴ノ覽シヌレは時イ序レ推選たり水千

「り」

- 1 白ト雲ヲ於テ玉ヲ檢ニ罪ハセリ

- 2 衆ノ罪ヲ蕩シ滌ケリ
- 3 險シきコトを冒セリ
- 4 見ニ卷ト軸ト成セリトモ

- 5 国威ヲ恃ミて而道ヲ訪ヘリ

- 6 既ニ暉ヲをハ於テ戸ノ牖ニ分テリ

- 7 潤ヲ於テ嚴ノ澁ニ流セリ

- 8 百千ノ日ヲ月ヲ掩ヘリ

- 9 伝ト灯ノ榮ニ添ハレリ

- 10 紙ヒ舛ケルコト尤ニ多シ

- 11 遺セリシ旨ヲ

- 12 前ノ典ニ徵レリ

- 13 炎ト火ヲ霑シて而積ト氷ヲ照ラセリ

- 14 成ク二冊ノ府ニ帰セリ

- 15 右ヲ永久点ニは次ノ如クに助動詞ヲ読添エない。

- 1 西母カ白ト環ト垂衣ノ之主ニ薦ム

- 2 東夷楛ノ矢刑措ノ君ニ奉ス

- 3 夸父カ之凌腐ノ所

- 4 経ノ題ヲ為レト請ヒヌ

- 5 張シ齋カ望ミトモ而博キに非ス

- 6 班ト超カ俟チレトモ而未カ遠ス

- 1 提衡物ニ範ナリ

- 2 積氷ヲ照ス

3 心ヲ梵境ニ冥テ約也

4 龍宮之所儲ヲ

5 精クシク振越ヲ守(る)

6 歳積テ

7 英ヲ曩代ニ飛シ

1 鬪賓ノ孤鷲ヲハ選テ曩カムカ実ヲ稽カフ

2 躬ヲ撫イヘ息ヲ累テ凶ヲ失(ふ)

1 其ノ義ニ帰ス

2 尋求メ歴覽(る)ニ時。序推シ選(り)タリ

1 白雲(於)玉檢ニ霏ハス

2 衆罪ヲ蕩滌ス

3 陰ヲ冒イテ

4 見ニ卷軸ヲ成シテ

5 国威ヲ恃テ(而)道ヲ訪フ

6 既に暉ヒカリヲ(於)戸牖ニ分ツ

7 潤ヲ(於)巖涯ニ流ス

8 百千之日月ヲ掩ヒ

9 伝灯之榮ヲ添シ

10 紕ヒト紕ト尤(も)多(し)

11 遺旨ニ

12 前典ニ微ス

13 炎火ヲ圍シテ(而)積氷ヲ照ス

14 咸ニ冊府ニ帰ス

次に、平安初期点で詠添えた断定の「なり」「たり」(所謂形容動詞の語尾も含める)を永久点では詠添えないものがある。

「なり」

1 鷄ト園(の)奥ト典なる(は)英詞に託ッきて(而)宣ヒ暢フ

2 経たる途たる万里なレとも天ト威を估ミて尺ノ歩の如シ

3 奥なるを親ム

4 其の義なることに帰シヌ

5 百ト有三八國なり

「たり」

1 経たる途たる万里なレとも

永久点では体言だけの形で、断定の語を欠く。

「なり」

1 鷄ト園(の)奥ト典(英詞ニ託テ)宣ヒ暢セム

2 経途万里 天威ヲ估メハ咫歩ノ如(シ)

3 奥ヲ親

4 其ノ義ニ帰ス

5 百有廿八國

「たり」

1 経途万里

平安初期点の詠添語、受身「る」、使役「しむ」を、永久点では欠く例がある。

「る」

1 寤ニ朝化に資カレテ

「しむ」

1 豈に彩(しき)ことを(於)愚な臂に韜(たう)マシメ(む)ヤ
 2 天下を威(ま)シメテ(而)
 3 蒼津に泛(ふ)ヒテ(而)費(を)委(か)シメたり
 永久点では、動詞の訓だけになっている。

〔る〕

1 寇(こう)ニ朝化(て)ニ資(す)リ

〔しむ〕

1 豈彩ヲ(於)愚臂(ごへ)ニ韜(たう)マシムヤ
 2 天下ヲ威(ま)シテ(而)
 3 滄津ニ泛(ふ)テ(而)費(を)委(か)セリ

イ 形式名詞

平安初期点で、形式名詞「こと」、体言「く」(その意味用法よりして暫く形式体言と扱)を読添えている所を、永久点では欠くものがある。

〔こと〕

1 繕(と)写(し)する(こと)如(ごと)く(別(べつ)の)ことシ

2 獎(たう)ケ諭(ごん)フル(こと)を垂(た)レ(れ)たり

3 四(よ)表(ひょう)に載(の)レル(こと)有り

4 慕(ぼ)フ(こと)異(こと)にして荒(あ)れたる(こと)を懷(いだ)け(は)

5 遐(とほ)なる(こと)を窮(きう)メ(し)き(こと)を冒(ま)セリ

6 豈に彩(しき)ことを(於)愚(ご)な(る)臂(へ)に韜(たう)マシメ(む)ヤ

7 其の義なる(こと)に帰(か)シヌ

8 広(ひろ)衣(い)表(ひょう)を(陳(ちん)フ)る(こと)空(く)シ

9 弘(ひろ)フル(こと)遠(とほ)シ

10 英(えい)て(た)る(こと)を(翼(よく)伐(ば)に)飛(ば)シ
 11 瀉(しゃ)瓶(びん)の(く)敏(びん)イ(こと)を懷(いだ)チ
 12 紕(ぎ)ヒ(外(がい)ケル)こと尤(とほ)シ
 13 序(しよ)を構(か)フル(こと)
 14 歡(かん)喜(ぎ)とヨ(る)こ(ヒヨ)ろ(コ)ふる(こと)受(う)記(ぎ)を聞(き)ケル(か)如(ごと)シ

〔く〕

1 望(ま)クは(之)右(みぎ)筆(ひつ)を頰(か)テ(て)饒(たう)ニ左(ひだり)言(ごん)を以(も)てセム

永久点では次のように「こと」「く」を読添えないものがある。字音訓に改めたものが多い。

〔こと〕

1 繕(と)写(し) 別(べつ)ノ如(ごと)シ

2 獎(たう)諭(ごん)ヲ垂(た)レ(れ)タマヘリ

3 四(よ)表(ひょう)載(の)有(あ)リ

4 異(こと)ニ慕(ぼ) 荒(あ)懷(く)

5 遐(とほ)ヲ窮(きう)メ(し)イテ

6 豈彩ヲ(於)愚臂(ごへ)ニ韜(たう)マシムヤ

7 其(その)ノ義(ぎ)ニ帰(か)ス

8 空(く)ク衣(い)表(ひょう)ヲ陳(ちん)シ

9 弘(ひろ)ク遠(とほ)ク

10 英(えい)ヲ翼(よく)代(た)ニ飛(ば)シ

11 瀉(しゃ)瓶(びん)之(の)敏(びん)ニ愧(か)シ

12 紕(ぎ)ヒ(外(がい)ケル)尤(とほ)多(た)シ

13 序(しよ)ヲ構(か)タマヘリ

14 歡(かん)喜(ぎ)、受(う)記(ぎ)ヲ聞(き)ク(か)如(ごと)シ

1 望(む)ニ(之)右筆ヲ班シ 飭ニ左言ヲ以セム

(二) 形式動詞

平安初期点で形式動詞「する」を説添える所を永久点では欠くものがある。

物に在(す)るす(ら)猶し迷ヒヌ^ト物ニ在テ猶迷(ひ)ヌ
詮^ト序^スすること有^ラズ
↓ 鈴序有(ら)ず

(四) 敬語の形式動詞

平安初期点で敬語を用いている所を、永久点では欠く例がある。

〔平安初期点〕

1 人の欲に天從(ひ)したマ^レば

2 柴尚(に)勅(し)たマ^フ

3 墨勅を奉た(て)ま^{ツル}に

〔永久点〕

1 人(の)願ヒ(に)天從ヘリ

2 柴尚(に)勅ス

3 墨勅ヲ奉ス

B 平安初期点で用いた説添語と、同箇所に永久点で用いた説添語と異なるもの。

説添語が異なるうち、(a)平安初期点のは当期特有の説添語であるもの、(b)平安初期点・永久点ともに他見のある説添語とに分れる。

(a) 平安初期点特有の説添語。

〔ヤ〕 (間投助詞の単独用法)

〔平安初期点〕 其(の)ひとは惟(れ)法師なりヤ〔乎〕

〔永久点〕 其唯、法師〔乎〕

〔ヤ〕は後世は「豈」「況」「寧」の結びとして「ムヤ」「ヲヤ」な

ど複合形で主として用いられる。

(b) 平安初期点永久点ともに他見のある説添語。

助詞のうち、接続助詞と格助詞「を」「に」「と」、及び助動詞のうち回想「き」・完了に異同が見られる。

(四) 接続助詞

平安初期点「ども」「とも」「ば」を説添えて逆接・順接条件とする所を、永久点「て」を説添えて中性的訓法とする。

〔平安初期点〕

1 見ニ卷軸と成セリとも未だ詮^ト序^スすること有^ラズ

2 歳積(り)たレトも(略)鷲嶺に栖ルこと得^ムヤ

3 経たる途たる万里なレとも天^ノ威を估みて尺^ノ歩の如シ

4 王^ノ舎(の)之^ノ基 婆^ノ陀^ノア^レトも(可)陟(む)ベシ

5 心拙なケ(れ)ば物に在(す)るす(ら)猶し迷^ヒヌ

〔永久点〕

1 見ニ卷軸ヲ成シテ未(た)鈴序有(ら)ズ

2 歳積テ(略)鷲嶺ヲ観(る)コト得タリ

3 経^ノ途 万^ノ里 天威ヲ估^シハ咫歩ノ如(し)

4 王城之基波^ト陀^トカタクツレシテ尚在(リ)

5 心拙(ク)シテ物ニ在テ猶迷^ス

次もこれに準ずるものである。

先王(の)之(九)洲も百千(の)之(日)月を掩^ヒリ (初期点)

先王之九州シテ百千之日月ヲ掩ヒ (永久点)

尋求(め)歴^ト覽(し)ヌレハ 時^ノ序^ヲ推^テ選^{タリ} (初期点)

尋求(め)歴^ト覽(る)ニ 時^ノ序^ヲ推^シ選^{タリ} (永久点)

次の例は平安初期点で回想表現をするために「シも」と用いた所

を、永久点では平叙したために「ども」を用いたものである。

班超か侯子シモ「而」未^レ遠^クア^ラず、張騫か望^ミシモ

「而」博^クヲ非^キ（初期点）

班超候レトモ「而」未^レ速^ク（未^レ、張騫望^メトモ「而」

博^キに）非^ス（永久点）

平安初期点で「て」を詠添えた所を、永久点では「ども」「ば」と詠添えた例。しかし文意としては平安初期点の「て」の方の訓が自然である。

〔平安初期点〕

1 六^ノ交^ハ蹶^ヲ探^リテ「於」生^ノ滅^ノ（「之」場^ニ局^シ）

2 「非」干^ノ葉^ニ乗^リテ「雙」林^ニ詣^ル（「之」詣^ルマツルこと）

3 経^{タル}途^{タル}万里^{ナレドモ}天^ノ威^ヲ怙^ミテ尺^ノ歩^ノ如^シ

〔永久点〕

1 六^ノ交^ハ蹶^{ナル}ヲ探^レトモ「於」生^ノ滅^ノ場^ニ局^シ

2 干^ノ葉^ニ乗^ルに「匪」^ニ雙^ニ林^ニ詣^ル（「之」詣^ルコト）

3 経^ル途^ヲ万里^天威^ヲ怙^ハ尺^ノ歩^ノ如^シ

次の例も準ずるものであろう。

江^ノ河^ノ地^ヲ絶^テ亦^タ潤^ヲ於^テ巖^ノ澗^ニ流^{セリ}〔平安初期点〕

江^ノ河^ノ地^ニ絶^ルモ亦^タ潤^ヲ於^テ巖^ノ澗^ニ流^ス（永久点）

(ii) 格助詞

平安初期点の「と」を永久点では「に」または「を」とする。

壤^ト紀^{セリ} ↓ 壤^ニ紀^シ

域^ト著^{セリ} ↓ 域^ニ著^{セリ}

朝^ノ露^ト均^シ ↓ 朝^ノ露^ニ均^シ

若^ク木^ヲ苑^トシ^テ ↓ 弱^ク木^ヲ苑^ニシ^テ

卷^ノ軸^ヲ成^{セリ}とも ↓ 卷^ノ軸^ヲ成^{シテ}

兩^ノ儀^ヲ照^シ配^{シテ} ↓ 兩^ノ儀^ヲ照^シ配^{シテ}

平安初期点の「を」を永久点では「に」とする。

(i) 動詞の自他の変更に基づくもの。

律^ヲ響^カす ↓ 律^ニ響^ク

皇^ノ壺^ヲ馮^ミテ ↓ 皇^ノ壺^ニ馮^リテ

班^ヲ馴^レ ↓ 班^ニ馴^レ

蕭^ノ草^ヲ落^リ ↓ 蕭^ノ草^ニ落^リ

天^ノ恩^ヲ荷^ヒテ ↓ 天^ノ恩^ニ荷^ヒテ

天^ノ廊^ヲ御^ス ↓ 天^ノ廊^ニ御^ス

物^ヲ範^ルたり ↓ 物^ニ範^ルナリ

感^ノ英^ヲ逸^ス（「に」ス ↓ 咸^ニ英^ニ逸^ス）

木^ヲ弦^テ ↓ 木^ニ弦^テ

(ii) 動詞の訓は同じであるが、変更したもの。

敏^ノこと^ヲ愧^フ ↓ 敏^ニ愧^フ

遺^リ（「し」旨^ヲ窮^ツ ↓ 遺^旨窮^{タリ}）

江^ノ河^ノ地^ヲ絶^テ ↓ 江^ノ河^ノ地^ニ絶^テ

百^ノ王^ヲ掩^テ ↓ 百^ノ王^ニ掩^テ

境^ヲ涉^ラず ↓ 境^ニ涉^ラ未^レ

平安初期点の「に」を永久点で「を」とする。

(i) 動詞の訓に変更があるもの。

鷲^ノ嶺^ニ栖^{コト} ↓ 鷲^ノ嶺^ヲ觀^ル（「之」詣^ルコト）

柴^ニ忝^リ ↓ 柴^ヲ忝^シ

(ii) 動詞の訓が同じもの。

千古に跨^{アツクム}て ↓ 千古ヲ跨^{アツクム}テ

塵の表に出^デたり ↓ 塵表ヲ出^デタリ

曩^{カミ}一^{カミ}衣^{カミ}に稽^{カミ}ツ ↓ 曩^{カミ}衣^{カミ}ヲ稽^{カミ}テ

方^{カタ}輿^{カタ}に煙^{カタ}て ↓ 方^{カタ}輿^{カタ}ヲ煙^{カタ}テ

平安初期点の「は」を永久点で「が」とする。これは「西羌」「東夷」を平安初期点で主語と訓じたのに対して、永久点は連体語と訓じた相違に基づく。

西^セ羌^{キョウ}ハ白^{ハク}き環^{カン}を垂^チ衣^イの^ノ^ノ君^{キミ}ニ薦^{タテマツ}りき、東^{トウ}夷^イハ楛^コノ矢^ヤを刑^{ケル}措^スの^ノ君^{キミ}ニ薦^{タテマツ}りき

西母^{セボ}カ白^{ハク}環^{カン}垂^チ衣^イ之主^ノニ薦^{タテマツ}ム、東^{トウ}夷^イハ楛^コノ矢^ヤ刑^{ケル}措^ス之^ノ君^{キミ}ニ奉^{タテマツ}ス

(イ) 回想・完了の助動詞

平安初期点「き」「たり」の詠添語を永久点は共に「り」とする。

開^{ヒラ}きたり ↓ 開^{ヒラ}けり

委^{オモ}たり ↓ 委^{オモ}せり

垂^チれたり ↓ 垂^チタマヘリ

入^イ納^{ナク}れたり ↓ 納^{ナク}タマヘリ

謁^{ケツ}マツりき ↓ 謁^{ケツ}セリ

平安初期点「ツ」「ム」の詠添語を、永久点は共に「たり」とする。

窮^{キウ}ツ ↓ 窮^{キウ}タリ

得^{トク}ムヤ ↓ 得^{トク}タリ

平安初期点「ヌ」を永久点「ツ」とする。

悉^{シツ}ヌ ↓ 悉^{シツ}ツ

C 「A」と反対に、永久点には詠添語を存するもの。

(イ) 助詞「を」「の」の詠添

正^{シヤク}レ名^{レナ} ↓ 正^{シヤク}レ名^{レナ}

史^シ曠^{クワン}ニ 前^{ゼン}良^{リョウ} ↓ 史^シ曠^{クワン}ニ 前^{ゼン}良^{リョウ}

玄^{ケン}奘^{ゾウ}識^{シキ} 竜^{リウ}樹^{ジュ}に乖^ヒきて ↓ 玄^{ケン}奘^{ゾウ}識^{シキ} 竜^{リウ}樹^{ジュ}ニ乖^ヒテ

「ヲ」は直上の「糞ヲ」の誤点か

膜^{マク}一^{イツ}挿^{シャク}の^ノ郷^{キョウ}に展^{テン}転^{テン}シ、重^{ジュウ}賦^フの^ノ外^{ガイ}に流^{リウ}離^リシ

↓ 膜^{マク}一^{イツ}挿^{シャク}之^ノ郷^{キョウ}ニ展^{テン}転^{テン}シテ重^{ジュウ}賦^フ之外^{ガイ}ニ流^{リウ}離^リセリ

紀^キを握^ウりて時^{トキ}に乘^ノり、衝^{ウツ}を提^チげて物^{モノ}を範^{ハン}たり

↓ 握^ウリ紀^キ時^{トキ}ニ乘^ノリテ、衝^{ウツ}衡^{ヘイ}物^{モノ}ニ範^{ハン}ナリ

紫^シ育^{イク}を^ヲ於^オ貝^{バイ}闕^{ケツ}に浮^ウへ、白^{ハク}雲^{ウン}を^ヲ於^オ玉^{ギョク}檢^{ケン}に霏^ヒハセリ

↓ 紫^シ育^{イク}ヲ^ヲ於^オ貝^{バイ}闕^{ケツ}ニ浮^ウテ、白^{ハク}雲^{ウン}ヲ^ヲ於^オ玉^{ギョク}檢^{ケン}ニ霏^ヒハス

上^ウは皇^{クワン}靈^{レイ}に仮^カり、下^カは嬪^{ヒン}の命^{メイ}に資^シかれ

↓ 皇^{クワン}靈^{レイ}ニ馮^{ホウ}ミ仮^カテ身^ミヲ頤^イシ

(イ) 助動詞「り」「たり」の詠添

存^{ゾン}シ ↓ 存^{ゾン}セリ

流^{リウ}離^リシ ↓ 流^{リウ}離^リセリ

從^{ゾウ}ヒ^ヒたマヘハ ↓ 從^{ゾウ}ヘリ

尽^{ジン}す ↓ 尽^{ジン}セリ

逸^{イツ}ス ↓ 逸^{イツ}タリ

初^ソの二例は平安初期点が対句の中止形で、下句の結びに「り」が詠添えられているのに対して、永久点是对句の上句・下句共に終止とし各々に「り」を持っている。

(イ) 形式名詞「こと」の詠添

奉^{ほう} 勅^{ちく} 翻^{ほん} 訳^{やく} 一 ↓ 蒙^{もう} 遣^{せん} 二 ↓ 翻^{ほん} 訳^{やく} 一

使^し 翻^{ほん} 訳^{やく} (を) 賜^{たま} は(り) て ↓ 賜^{たま} 使^し 二 ↓ 翻^{ほん} 訳^{やく} 一

反^{はん} 二 ↓ 帝^{てい} 京^{けい} 二 符^ふ 二 紀^き 二 ↓ 返^{へん} 二 帝^{てい} 京^{けい} 二 淹^{えん} 二 邇^{えい} 二 紀^き 二

〔無〕任^{にん} 欣^{きん} 存^{ぞん} 二 之^の 極^{ごく} ↓ 無^む 任^{にん} 欣^{きん} 荷^か 之^の 極^{ごく} 一

本文の字句の異り或いは訓法の異なりに基いている。

(四) 形式動詞「す」の読添

永久点が語序に忠実な訓法に従った結果の所産である。

(一) 敬語の形式動詞「タマフ〔四段〕」の読添

垂^たれたり ↓ 垂^たタマヘリ
納^なれたり ↓ 納^なれタマヘリ
入^い構フルこと ↓ 構^かタマヘリ

II 二資料で同じ読添語

平安初期点と永久点とで読添語を同じくするものは、格助詞「が」(主格・連体格)、「の」(同上)、「に」を「と」、接続助詞「て」「し」

「ども」「ば」、副助詞「のみ」、係助詞「か」、間投助詞「や」

「むや」と固定用法、助動詞では完了「り」「たり」「ぬ」、推量

「む」、断定「なり」「たり」、比況「ごとし」、形式名詞「こと」、

形式動詞「す」がある。(例略)

右のうち、格助詞「の」(二十二例)・「に」(五十例)・「を」(七十

七例)及び接続助詞「て」(二十一例)の共通例は数が多いが、他

は、(括弧の数字は例数)
「が」(四)、「と」(四)、「は」(四)、「し」(三)、「ども」(一)、「
「は」(二)、「のみ」(永久点は「而已」の訓)(二)、「や」(一)「むや」

の形で(二)、「か」(一)、「り」(五)、「たり」(三)、「ぬ」(一)、「
「む」(五)、「なり」(六)、「たり」(二)、「ごとく」(一)、「ごとく」
(三)、「す」(七)
である。

以上、平安初期点と永久点との読添語の異同を整理すると、一定

の傾向が見てとられる。即ち、

(一) 平安初期点における添意性の助詞は、永久点では用いられな

なるか、少なくなる。

(二) 永久点で用いられなくなった助詞

(強意指示) し (強意指示)
くのみ (感動・強意) や (感動)

(三) 永久点で使用例が少ない助詞

添意助詞「は」「も」「すら」、及び「を」(間投助詞的用法)

平安初期点で用いた諸種の類義語の意味を、永久点では捨象し

て特定語に代表させ用いるもの。

(四) 永久点の接続助詞「て」

平安初期点では逆接既定「ども」、逆接仮定「とも」、順接「ば」

と個性的に訓分けている所を、永久点では一律に「て」と中性

的訓法に変わっている。平安初期点で用言連用形のままで中止し

ている所を、永久点では各々更に「て」を読添えて訓法を画一

などの「五つ」と及び「ト与ニ」等特定用法である。「を」を「に」に訓変える例が多いのは、一面動詞の自他の訓変えに基づく変更にもよるが、他面、同じ訓法の動詞に続く際にも訓変えがあるのによると、「を」が間投助詞的性格を初期点では残していた(補説参照)のが、次第に格表示語に転ずる動きと関係があらう。「に」を逆に「を」と訓ずる例は右の事情を背景としての動きであらう。

(イ) 永久点における完了の「り」「たり」

読添の助動詞における異同は所謂時制表現に顕著である。しかも平安初期点の「き」「たり」が永久点では「り」に、初期点の「つ」「む(や)」が永久点で「たり」となる。永久点で「たり」が用いられる場合は、四段・サ変以外の動詞附属であるから、「り」の動詞附属上の不備を補って用いられることになる。

(ロ) 永久点の敬語「タマフ(尊敬)」「タテマツル(謙讓)」

平安初期点に読添えられた「タマフ」「タテマツル」が永久点では欠くものあり、逆に永久点で加わったものもあり、両資料共に見られるが、絶対量としては永久点の方が少ない。

平安初期点の「マツル」は永久点には全く見ない。「タマフ」と「タテマツル」とは後世は尊敬・謙讓の諸種の読添敬語の代表として主に用いられたものである。

(ハ) 永久点では、格表示語(接続助詞も含む)・時制の助動詞など最小必要限に読添えられる。

(イ) 平安初期点で従属文の主語に訓じて「の」「が」を読添えた所は、永久点では単文の主語とし、格関係表示は語序に委ねる。又、初期点の連体格「の」も、永久点では語序に委ねるか、

字音語の熟語に訓ぜられた為に用いられなくなっている。(但し和語の連体格表示等の必要から永久点にも「の」は存する)

(ロ) 時制の読添語(回想「き」、完了「たり」「り」「ぬ」「つ」)を両資料で比較すると絶対量は永久点が遙かに少ない。平安初期点で読添えている所を、永久点で欠く例が多いのはそれを物語る。

(イ) 永久点では断定の「なり」「たり」の読添語を欠き、字音語だけの形に委ねる場合がある。

(ロ) 平安初期点と永久点ともに、同じ箇所同じ読添語を用いる中、例数が多いのは、「の」(連体格)、「に」「を」(連用格)、「て・して」(接続)である。これらは語と語、句と句との関係を示す「関係助詞」で、日本語の構文上必要な読添語である。

(ハ) 両資料に各々存する「こと」「する」の読添語も、原文の用言的短句を国語の体言とし、或いは体言的短句を国語の用言とする上に又必要なものである。

以上の(イ)(ロ)(ハ)の三点に共通して見てとられる傾向は、読添語の個々の微妙な意味の差を捨てて、抽象的な情意性の乏しい文章が成ったことである。その結果として平安初期の種々の読添語はその種類と量を減少した。訓読語の読添語は平安初期においてさえ、一般の文章に比べると限られていた。それが一層甚しくなったのである。

読添語は、漢字毎に国語を一々対応させた場合に、原漢文にそれに対応する漢字がない所の、いわば漢文の文字面からはみ出した訓読語である。それが淘汰される現象は、助字において「辞訓から訓」に安定した特定訓が定まり、国語と漢字とに一对一の関係が成立する第一項の傾向と共通した動きである。

【補説】

(一)について。

平安初期特有の読添語は、中期以降は複合語の構成成分の一となつて、(イ)漢字の傍読となつて残存するか(或・而已・耳・猶・但・乃)、(ロ)陳述副詞等の呼応語の一部となつて残存する(「尊・寧・寧……むや」「必……シモ」「非……ニシモ」)(副詞の呼応語については第四項参照)。

「い」が平安初期特有語であり、平安中期以降は一般に用いられなくなること、及び「くのみ」が平安初期の訓読語としては、助字「耳」「而已」とは無関係に読添えられて感動・強意の意を添えたことについては(注2)の關係論文参照。間投助詞「や」については築島博士「漢文訓読語の係助詞について」(語文研究一〇)に詳述されている。

「は」「も」「すら」は平安初期点で読添えられた所に永久点で欠く場合が多く、初期点と永久点とに共通する「は」の例は少ない。「も」「すら」の共通する例はないが、永久点の他箇所には少数ある。

江河池二紀(志)モ亦潤ヲ(於)嚴漣二流ス(永久点卷六)

徒一侶衆多スヲ猶數迷失ス況師单独ニシテ如何シテカ行(一)可

(からむや)(永久点卷三)

格助詞「を」は感動の助詞から転じたもので、平安時代前半期には格表示に必須のものでなかったことは諸氏の論ずる所である。訓読語でも平安初期には、主語に付いたり(訓点語の研究三七二ペ以下)、格助詞「ニ」と重なつたり(例えば東大寺諷誦文)する例のあるのは、初期訓読語の「を」の中にまだ添意性のあつたことを推測

させる。

(二)について。

平安初期の読添語の敬語には、尊敬「イマス」「マス」「オモホス」「タマフ」「ノタマフ」、謙讓「マウス」「タテマツル」「ハベリ」「マツル」「タマフル」等広く用いられているが、中期以降は「タマフ」(尊敬)、「タテマツル」(謙讓)に代表されて行く傾向がある。「タマフ」「タテマツル」は後世「上」「下」の如く符号化しても用いられた程である。

○永久点に新に加わつた特有の読添語は見られない(注18)。

第三項 詞訓字

平安初期点の詞訓字は、永久点でも詞訓である。しかも共に同訓であるものが多い。訓が変更したものの不変更のものに対する比率は、(一)助字、(二)読添語において変更した語の不変更のものに対する比率より遙かに小さい。

I 詞訓字における変更は次の場合である。

A 和訓を字音語とする。B 和訓を更に平易な和訓とする。C 文選読の減少。D 音韻変化の反映、である。

A 平安初期点の和訓の字を永久点で字音とする。

この異同は、相違のある例中では例が多い。例えば平安初期点の

1 西光ハ白き環たまはを垂た衣の(の)二君后二薦リき

2 衆の罪ヲ蕩シン条ケリ

3 紙シケルコト尤ニ多シ

4 史文入

は、永久点では、

1 西母カ白環 垂衣之主ニ薦ム

2 衆罪ヲ蕩滌ス

3 糺奸 尤(に)多(し)

4 史

の如くである。以下全例を挙げる。(矢印の上が平安初期点、下が永久点)

永久点

微(レ)リ ↓ 微(す)

衡を提(キ)ケテ ↓ 提衡

発(キ)秀(テ) ↓ 秀を発し

阿(に)巢(ひ)テ ↓ 巢阿

凌(ス)属 ↓ 凌属

広(キ)菜(も) ↓ 広菜

奇(し)き珍(も) ↓ 奇珍

兩(儀)と照(し)配(ヒ)テ(而) ↓ 兩儀ヲ照配シテ

欣(ヒ)符(フ)ノ(こと)ノ ↓ 欣符

補(ケ) ↓ 補す

奉(け)た(て)ま(す)ツルに ↓ 奉ス

御(メ) ↓ 御ス

搜(揚)揚(げ)テ ↓ 搜揚(して) 經(たる)途(たる) ↓ 經途

英(て)たる(こと)を(を) ↓ 英を

塵(の)表(に) ↓ 塵を表

紀(を)握(リ)テ ↓ 握紀

沢(は) ↓ 沢

楽(ヲ)圍(ニ)シテ ↓ 楽圍

時(イ)序(れ) ↓ 時序

宝(の)舟(を) ↓ 宝舟

響(の)味(き)に ↓ 響味ニ

截(レル)こと有(リ) ↓ 截有(り)

範(の)たり ↓ 範ナリ

委(シ)メたり ↓ 委セリ

幽(カ)ニ微(シ)(き)を(は) ↓ 幽微ナリ

眞(ハ) ↓ 眞

謁(ヘ)マツリキ ↓ 謁セリ

宣(暢)フ ↓ 宣暢セム

振(リ)越(ケ)タリ ↓ 振越

契(ケ)噓(フ)ル(こと)を ↓ 契噓

朝(の)露(と)均(シ)ク ↓ 朝露ニ均シ

秋(の)蟲(の)む(シ) ↓ 秋蟲

險(シ)キ(こと)を ↓ 險ヲ

忝(リ) ↓ 忝シテ

儲(ヘ)たる(所)を ↓ 所儲ヲ

踐(ミ)藉(リ)シ ↓ 踐藉(する)

慈(の)雲 ↓ 慈雲

恩(の)榮(を) ↓ 恩榮ヲ

敏(イ)こと(を) ↓ 敏ニ

但(し)、次(の)様(な)反(対)例(が)あ(る)。

盤(足) ↓ 盤ノ足

歴(覽) ↓ 歴覽(し)ヌレハ ↓ 歴覽(る)ニ

無(方)なり ↓ 方無(し)

全体(か)ら見(て)量(も)少(く)な(く)例(外)的(な)存(在)で(あ)る。

B 和(訓)を(別)の(平)易(な)和(訓)と(す)る。

(休言)

(イ) 息 ↓ 息

(ロ) 費 ↓ 費

(用言)

巖(の)涯(に) ↓ 巖涯ニ

愚(な)ル(臂) ↓ 愚臂ニ

遐(なる)こと(を) ↓ 遐を

遺(セ)リ(し)旨(を) ↓ 遺旨ニ

符(ヘ)リ ↓ 符ヲ

陳(フ)(る)こと ↓ 陳シ

戸(の)廊(に) ↓ 戸廊ニ

天(の)廊(ヲ) ↓ 天廊ニ

蘆(灰) ↓ 蘆ノ灰

推(選)たり ↓ 推シ選タリ

振(錫)に ↓ 錫ヲ振(る)ニ

梯 ↓ 梯

薦(き) ↓ 薦

麗(り) ↓ 麗リ

忝(り) ↓ 忝

符(テ) ↓ 符テ

(四) 弦^{シヤ}て↓弦^{シヤ}テ
局^ク↓局^ク
搜^{ソウ}て↓搜^{ソウ}テ
齊^{サイ}リ↓濟^{セイ}
馮^フて↓馮^フテ
懷^{クワイ}ハ
撫^フ↓撫^フ
猥^ウテ↓猥^ウテ
微^{クワイ}て↓微^{クワイ}テ
馴^{ジュン}↓馴^{ジュン}
資^{サイ}て↓資^{サイ}
接^{ケツ}↓接^{ケツ}
研^{ケン}↓研^{ケン}
究^{クウ}て↓究^{クウ}テ

〔副詞〕

(四) 親^{シン}↓親^{シン}
尋^{ジン}↓尋^{ジン}
且^チ↓且^チ

永久点(矢印の下)の「息」「梯」「探ル」から「尋」までの訓はすべて、永久点に接近する辞書の類聚名義抄(観智院本)・色葉字類抄(前田本・黒川本)に収載されている。然るに平安初期点の和訓(矢印の上)では、(四)に分類した「覓」「搜」て「馴」以下「且」「尋」の訓は収載されているが、(四)に分類した「息」「梯」「探」以下「微」「資」は名義抄に収載されていない。字類抄を検しても名義抄におけると大同である。室町時代以後の国語辞書によると、(四)に分類した訓の場合でも、多くは永久点に見える訓の方が収載されている。例えば温故知新書には次の如くある。

搜^{ソウ} 馴^{ジュン} 懷^{クワイ} 覓^ミ 探^{タン} 覓^ミ 探^{タン}

室町時代の国語辞書の訓の性格から考えて、永久点の和訓が平易な通俗的なものであったことが窺われる。

C 文選読の減少

平安初期点で文選読の語を永久点では、音か訓か一訓だけの読

(多く字音語)にしている。
秋の蝨の(む)シ ↓ 秋の蝨^シ反
踊^{ユウ}躍(と)アカリ欣喜とヨ(ろ)こ(ヒヨ)ろ(こ)ふる(こと) ↓ 踊躍^{ユウユウ}
欣喜
冲^{シュウ}逸(とはる)カなり ↓ 冲逸^{シュウイ}ニシテ
曠^{クワン}トオキロにして ↓ 曠^{クワン}シ

しかし反対例もあり、
祇園之路 麗^{レイ}逸^イたれトも ↓ 髣像トホノカニシテ
王舍之基 梁^{リョウ}一随^ジとアレトも ↓ 坡^ハ一随^ジトカタクツレ(に)シテ
永久点には、他巻にも散見するが、平安初期点の他表にも多く、結局絶対量としては永久点の文選読は減少している。
D 音韻変化の反映

平安初期点では音便でない形を、永久点では音便形にする。
1 天(恩)を符^フて ↓ 天恩^{テン}ニ符^フテ
2 来^{ライ}意^イを悉^{シツ}ヌ ↓ 来意^{ライイ}ヲ悉^{シツ}ツ
II 二資料で異なるない詞訓字
A 名詞

- (a) 字音語(仮名、音符等で字音と知られるもの。一五五語)
夏載^カ ↓ 夏載^カ 濛^{モウ}池^チ ↓ 濛^{モウ}池^チ (他略)
- (b) 和語(仮名、実字訓で知られるもの。八語)
暉^{ヒカ} ↓ 暉^{ヒカ} 声^{セイ} ↓ 声^{セイ} (他略)
- (c) 無注記の語(字音か和語か不明。多くは字音語か。七五語)
雲官^{ウン} ↓ 雲官^{ウン} 経論^{キョロ} ↓ 経論^{キョロ} 力^{リキ} ↓ 力^{リキ}

B 代名詞(六語)

其の↓其の 斯の↓斯ノ 己か↓己カ

C 動詞(九十五語)

墮^{ツク}テ墮^{ツク}テ 朝^{アサ}朝^{アサ} 爛^シリ爛^シリ
罪^{ツミ}リ罪^{ツミ} 估^ヒテ估^ヒハ 征^セ征^セ

D 形容詞(十六語)

夙^{ソク}夙^{ソク} 近^{チカ}近^{チカ} 精^{シツ}精^{シツ}

E 副詞(全例を挙げる。例数を示さないのは各一例)

(a) 豈に↓豈(四例) 況や↓況 相ヒ↓相
云は(く)↓云 乃チ↓乃 止し↓止
何^{ナニ}以て(か)↓何以カ 又↓又 独^{ヒト}↓独
自^{ミヅカ}↓自 能(く)↓能(く) 獨^{ヒト}↓獨

(b) 「下」の形

聊(か)に↓聊(か)ニ 見に↓見ニ 言^{コト}↓言^{コト}
是の故に↓是ノ故ニ 咸クに↓咸(く)ニ 幸に↓幸ニ(二例)
己に↓己ニ 既に↓既に 徒に↓徒ニ
忽に↓忽ニ 遂に↓遂ニ(四例) 具に↓具ニ
与に↓与ニ 俱に↓俱ニ 並に↓並ニ(二例)
竊に↓竊ニ(二例) 竄^{ヌスビ}に↓竄^{ヌスビ}ニ 尤^{モト}↓尤^{モト}ニ
固ニ↓固ニ 方^{カタ}に↓方^{カタ}ニ(二例) 故に↓故(に)
(c) 「て」の形
敢^{カウ}て↓敢^{カウ}て 累^{カキ}て↓累^{カキ}て 重^{カキ}て↓重^{カキ}て
敢^{カウ}て↓敢^{カウ}て 累^{カキ}て↓累^{カキ}て 重^{カキ}て↓重^{カキ}て
祇^{ツギ}↓祇^{ツギ}テ 謹^{ツツ}↓謹^{ツツ}テ 重^{カキ}て↓重^{カキ}て

副詞の訓が両資料で殆ど変更しないのは(変更は前掲三例のみ)注意すべきである。思うに詞の訓として固定していたからであろう。

以上相違のある四項のうち、音韻変化の反映を除く三項には、一定の傾向が見てとられる。即ち、原漢文中の一漢字に詞の訓が与えられる際に、その漢字の読として可能な諸訓または音の中から、選択に勞しない、その漢字の訓として一般的な特定詞訓が採られる。

(4) 永久点で字音語が多い一因は、和訓選択の勞が省かれたためと考える。類聚名義抄を引くまでもなく、国語となった各漢字には多くは二個以上の和訓がある。その中から原漢文の文意に忠実な訓を選びないしは考案すれば、個性的な訓が生ずる。これに対して字音語を用いれば選択ないしは付訓の勞は省かれる。その代り意味は抽象化されることになる。それは、日本語彙中に字音語が浸透する過程と表裏している。

(4) 文選読の減少も、音と訓との二重負担を避け、一漢字に一定訓を付与する動きに連なる。

(4) 和訓が、別の、後世の辞書の訓に一致する一般的な訓に変わったのも、文意に応じて同一漢字を個別的に訓分けるのではなく、平易な一定訓を選ぶという現れと考えられる。さすれば(4)(4)の傾向と同じく訓の固定化の傾向の一と見られる。

詞訓字で相違するものについては右の如くであるが、一方詞訓字で二資料とも同じものが多い。それらは一般的な詞の訓として比較的安定性があつた為であろう。

詞訓字における一漢字に一定訓を固定させようという傾向は、亦第一項の助字毎に詞訓を固定させようとし、第二項で見た読添語の減少傾向と同傾向と見てとられる。それは漢字一字毎に国語との対応関係を定着させようとするものである。その背景に見られるのは、漢文を全文体として把握してこれに対応する国語を当てるとす

る平安初期の個性的な訓詁態度に対して、永久点の態度は、漢字一字毎の訓を考えて、それに従って画一的機械的に訓詁することである、と考えられる。

音韻変化は、訓点においては、表記方と相俟つて如実に反映される。(訓点資料が音韻史に大きく寄与した事実がこれを物語る。)訓詁語の変遷が一定傾向に従つて一定範囲内で行われるのとは異質である。従つて漢文訓詁史においては、音韻・表記の問題は別に扱わなければならない。

第四項 副詞の呼応語

I 二資料で呼応語が異なるもの。

A 「豈」の呼応語

平安初期点では、(a)「已然形ナヤ」で呼応する例

1 豈止^止区々たる梵衆^梵獨^獨恩^恩の榮^榮を符^符ヒ、蠶^蠶々たる迷^迷生^生、方^方

に塵^塵累^累を超^超ユルのみなれヤ(に)あ^あれ(や)〔而^而已^已〕

2 豈^豈〔如^如〕漢^漢の張^張枚^枚を開^開して近^近ク金^金城^城に接^接キ、秦^秦、桂^桂、林^林を成^成リ

て裁^裁(も)珠^珠浦^浦に通^通ヘリ(し)かことき^このみなれ(や)〔而^而已^已〕

(b) 「ムヤ」で呼応する例

3 豈^豈能^能 仰^仰測^測 ムヤ

4 金^金壁^壁の奇^奇(し)き珍^珍も豈^豈彩^彩(し)きことを〔於^於〕愚^愚ナル賢^賢に韜^韜シ

メ(む)ヤ

他に第一表には「ジ」で呼応する例がある。

豈^豈若^若カ^カジ、竜^竜宮^宮の秘^秘せ^せる旨^旨、鷲^鷲嶺^嶺の微^微し(き)詞^詞の、群^群

迷^迷を〔於^於〕沙^沙界^界に導^導ヒキ、交^交一^一喪^喪を〔於^於〕塵^塵劫^劫に庇^庇サムには。

永久点では一様に「ムヤ」で呼応する様である。

1 豈^豈止^止区々タル梵^梵衆^衆ノ獨^獨恩^恩榮^榮ヲ荷^荷ヒ、蠶^蠶々タル迷^迷生^生、方^方ニ塵^塵累^累

ヲ超^超ル而^而已^已

2 豈^豈漢^漢ノ張^張枚^枚ヲ開^開テ近^近ク金^金城^城ニ接^接リ、秦^秦ノ桂^桂林^林ヲ成^成テ纒^纒ニ珠^珠浦^浦

ニ通^通(も)カ如^如クノミ而^而已^已

3 豈^豈能^能(も)仰^仰キ測^測(ら)むヤ

4 金^金壁^壁奇^奇珍^珍豈^豈彩^彩ヲ〔於^於〕愚^愚賢^賢ニ韜^韜ムヤ

B 「既・已」の呼応語

平安初期点では下に完了の助動詞を説添える。

1 既に暉^暉を^をは〔於^於〕戸^戸の牖^牖に分^分て〔り〕

2 已^已に英^英てた^たこと^{こと}を^を負^負一^一伐^伐に飛^飛ばシ

永久点では呼応語の完了の語を説添えない。

1 既^既ニ暉^暉ヲ〔於^於〕戸^戸牖^牖ニ分^分ツ

2 以^以レハ英^英ヲ負^負一^一伐^伐ニ飛^飛シ

C 「云」平安初期点では結びに「と」を以て呼応させている。

又、云^云は〔く〕、新^新撰^撰の西^西域^域の記^記を^をは〔者^者〕当^当に自^自ラ披^披ケ覽^覽ヨ〔み

よ〕と

永久点では呼応語を説添えない。

又云^{又云}は〔く〕、新^新撰^撰西域^{西域}(の)記^記(者)当^当ニ自^自(ら)披^披(け)覽^覽ル〔当^当シ

II 二資料とも呼応語が同じもの。

「況」の呼応語

両資料とも偶々「ムヤ」で同じ呼応語である。

况^况ヤ仏^仏教^教の幽^幽ニ微^微シ(き)を^をは、豈^豈能^能(も)仰^仰キ測^測ラムヤ

況^況ヤ仏^仏教^教の幽^幽ニ微^微シ(き)を^をは、豈^豈能^能(も)仰^仰キ測^測ラムヤ

(平安初期点)

朕、学浅(く)心拙(く)シテ物に在テ猶迷(ひ)ヌ 況(ヤ)仏教
幽微ナリ豈能(く)仰(キ)丰測(らむ)ヤ (永久点)

尚、再読字も本項に關係するが、その成立には助字の訓が關係深く、その箇所既述へたので省略する。

右の副詞の呼応語についても、一定の傾向が見てとられる。即ち
(一) 平安初期点で種々の呼応語を持ったものが、永久点では一定の呼応語に定まる。

豈—ムヤ 況—ムヤ・ヲヤ

(二) 平安初期点で呼応語を持ったものを、永久点では呼応語を欠く。

既—已—〇 云—〇

この傾向は、直接には第二項読添語のうち、必要最小限に止めて読添える傾向と共通し、間接的には前述三項の動きと探を一にして機械的・画的訓読態度の現れと見られる。

【補説】

A 「豈」の呼応が平安中期以降、一般に「ムヤ」で反語表現にすることは屢々説かれる。一方上代文献には、「豈—メヤ(已然形+ヤ)」「万葉三四五・三四六」、「豈—ジ(打消推量)」「万葉五九六」、「豈—ズ(打消)」「紀四九番・万葉三七九・三八詔」があるから平安初期点の訓法はそれらと關係があり古い訓法を示すものである。尚、初期には「豈—マシヤ」(最勝王経古点)等もある。

B 「既・已」に完了の助動詞を呼応させることは平安初期訓読の一般である(最勝王経古点の国語学的研究二三四頁)。しかし中期以降は読添えない方向が一般となる。

C 「云」を副詞的用法とする時、初期では後に「トイフ」の類を読添えるのが一般である。稀に「ト」と切ったり、何もなかったり(この場合は会話が続く際に多い)するのは読添語の脱落と見るべきとされる(同上書二九八頁)。後世はむしろ「イフ」を呼応させないのが一般である。例えば不空羼索神呪心経寛徳点では四例中、二例は「と」で呼応じ、他二例は何も読添えない。(B・Cについての例証は別稿を期したい。)

「況」の呼応は、右のように「況」の下文が、叙述語を備える際には、その叙述語に「ムヤ」を読添える。これは平安初期も中期以降も変らない。但し、下文が主語のみ、或いは修飾語のみで叙述語のない文では、

性罪を犯セル者スヲ尚し(是)は(如)くアルベシ。況(ヤ)其の余の諸の小遊の罪を犯セルイハ(十輪経元慶点)

我尚(し)国王大臣諸の在家の者の俗の正法に依(り)て鞭杖等を以て其(の)身を採(り)持(し)略(其の命を)断(つ)ことをは許(さ)不(す)。況(ヤ)非法に依(て)は。(同右)

の「犯セルイハ」「依ては」の如く、「況」の上の文の対応語の格と同じ格にし「は」を加えるのが平安初期点法である。しかるに中期以降はこの種のものは一様に没格「をや」になる。

但、隱念して隨意する福、已に无辺なり、況復書持(と)読誦等とをや(耶) (法華義疏長保四年点)

(古訓点の研究三四一頁以下。注2拙稿参照)。さすれば永久点の呼応語は「況」字全用法から見ると、平安初期点より形式化し稀少した用法の一である。

第五項 対句の訓法

対句の上句の結びの形式は、今日では中止形に訓むのが一般である。しかるに、古くは終止形であつて二文を対照させる訓法が多い(注1)。

平安初期点と永久点との対句の上句の訓法は、A平安初期点が終止形の箇所を、(a)永久点でも終止形とする。(b)永久点では中止形に変える。B平安初期点で既に中止形の箇所を、(c)永久点も中止形とする。(d)永久点では逆に終止形とする、の四つの場合がある。

A (a) 平安初期点の終止形を、永久点でも終止形とする。(三例)

西羌ハ白き環^オを垂衣^イの(之)后^ニ后^ヲリき

東夷は楛^オの矢を刑指^イの(之)君に踏^キりき (平安初期点)

西母カ白^ク環^ク 垂衣之主^ニ后^ム

東夷 楛^ノ矢、刑指^之君^ニ奉^スス (永久点)

右の外に二例がある。

(b) 平安初期点の終止形を、永久点では中止形に変える。(七例)

蟠木幽陵(を)は^レ雲官^イ軒^イ皇^ノの(之)壇^ニと紀^セリ

流^ト沙滄海^ヲをば夏載^イ伊堯^ノの(之)域^ニと著^セリ

(平安初期点)

蟠^ト木^ノ幽^ト陵^ナリ 雲^ノ官^ノ軒^ノ皇^ノ之^ノ壇^ニ紀^シ、流^ト沙^ノ滄^ノ海^ヲ 夏^ニ載^キ

伊堯^ノ之^ノ域^ニ著^セリ (永久点)

識^ト(は)、竜^ノ樹^ニに垂^キて謬^クて伝^フ灯^ノの(之)榮^ニに恭^シレリ

才^ハ馬^ノ鳴^ニ異^ニ(に)して深^ク薄^ク瓶^ノの(之)敏^イことを愧^チ(ツ)

(平安初期点)

識^ノ竜^ノ樹^ニ垂^テ謬^テ伝^フ灯^ノ之^ノ榮^ヲ恭^シ、才^ハ馬^ノ鳴^ニ異^ナリ深^ク

瀉瓶之敏ニ愧ツ (永久点)
右の外に五例がある。

B (c) 平安初期点で既に中止形の所を、永久点でも中止形とする。

(十二例)

千古に跨^リムて(以)声^ヲを飛^バし、百王を掩^ヒて(而)実^ヲを騰^ケたり (平安初期点)

千古ヲ跨^テ(以)声^ヲ飛^シ、百王ニ掩^テ(而)実^ヲ騰^ケ(け)たり (永久点)

赤坂に梯^ヲを(して)(而)朔^ヲ承^ケ、蒼津に泛^ヒて(而)贊^ヲを委^ケカシメたり (平安初期点)

赤坂^ニ梯^ヲシテ(而)朔^ヲ承^ケ、滄津ニ泛^テ(而)贊^ヲ委^セリ (永久点)

右の外に十例がある。

(d) 平安初期点で既に中止形の所を、永久点では逆に終止形とする。(三例)

遂に若木を苑^トして(而)濛^ノ泥^ヲを池^ニとシ、炎^ノ火^ヲを霽^シて(而)積^ル氷^ヲを照^ラセリ (平安初期点)

遂^ニ若^ク木^ヲ苑^シテ(而)濛^ノ泥^ヲ池^ニトス (永久点)

炎^ノ火^ヲ霽^シテ(而)積^ル氷^ヲ照^ラス (永久点)

皇^ノ靈^ヲ馮^リテ(以)速^ク征^キ、国威^ヲ恃^ミて(而)道^ヲ訪^フヘリ (平安初期点)

皇^ノ靈^ニ馮^リテ(以)速^ク征^ク、国威^ヲ恃^テ(而)道^ヲ訪^フ (永久点)

他に一例がある。この外に「命、朝の露と均シク(平安初期点)」

に對する「命朝露ニ均シ（永久点）」が「均シ（く）」の如く中止形か、そのままの形で終止形か不明のものが四例ある。

以上の例から、中止形は平安初期点にも既に多く見られ、その形は永久点でも踏襲される（但し例外もある）。平安初期点で未だ終止形を用いていたものの三分の二は中止形に訓変えられているといえる。即ち、終止形式から中止形式へという一般的傾向に合う。この動きの原因は未勘であるが、(b)の例を見ると、平安初期点で上句を終止形にする際には「リ」の如き読添語を上句にも必要としている。しかるに、上句を中止形とすると読添語は下句の結だけで済む。読添語の労が一つ省ける。中止形が多くなる原因の一はここにあるのではなからうか。

第三章 結語

本稿は引続いて次の作業が要請される。比較考証に用いた二資料の各の同時代における訓読語との比較および位置づけ。本稿で分類を試みた各事象の個々の訓読語の史的研究。そして、第一章方法の項で述べた如き、法華経・最勝王経・十輪経・弥勒経などにおける平安初期点と中期以降の二点又は三点以上の資料に拠る検証。

【付記】

本稿は昭和三十六年七月、大学漢文教育研究会で発表した原稿を基にして成ったものである。本稿関係資料調査には科学研究費の助成を受けたことを付記する。（昭和三十七年八月十六日成稿、十一月二十八日再治）

（注1）「漢文訓読史上の一問題―再読字の成立について」（国語

学十六輯、昭和二十九年三月）

「訓点語法史における副助詞「ら」（国語と国文学、昭和三十年十一月）

（注2）一、助字の訓法に關しては、

「らくのみ」「まくのみ」源流考（文学論叢八号、昭32 10）

「於」の訓の変遷（古点の況字統覧）（後掲）の（内）

及字の訓読（国文学言語と文芸四号、昭34・3）

博士読の源流―トキンバ（則）を一例として―（同右十四号、昭36・2）

漢文訓読史から見た打消の訓法（文学論叢十九号、昭36・3）

陳述の助字「之」の訓読（文学論叢二十三号、昭37・10）

二、読添語について

助詞イの残存―平安時代の使用者と用法―（東洋大学紀要十三集、昭34・3）

三、詞訓字について

代名詞の訓の性格（東洋大学国語国文学会発表、昭36・6）

四、副詞の呼応語について

言と辞との訓分け（訓点語学会発表、昭34・11）

古点の況字統覧（東洋大学紀要十二集、昭33・2）

がある。

（注3）中田祝夫「古点本の国語学的研究総論篇」七八三―

築島裕「訓点資料とその取扱ひ方」（国語と国文学、昭35・10）

（注4）「古点本の国語学的研究総論篇」九五二―

八

(注5) 同右書 三三二二へ以下

(注6) 築島裕「知恩院慈大唐三藏玄奘法師表啓古点」(訓点語と訓点資料四輯、昭30・5)

(注7) 同「興福寺政大慈恩寺三藏法師伝古点」(東大教養学部人文科学科紀要九輯、昭31・6)

(注8) 吉沢義則 国語国文の研究(再収) 大4・2

築島 裕 訓点語と訓点資料四輯 昭30・5

遠藤喜基 国語国文二十四ノ十一 昭30・11

中田祝夫 漢文教室三十号 昭32・5

山田忠雄 国語学二十九輯 昭32・6

(注9) 「注7」に同じ。

(注10) その一端については「注7」の文献で指摘されている。

(注11) 「助字并略」(清・劉淇)などに見える「助字」の意であるが、この概念規定は古来明確ではない。実際上の処理に当っては、牛島徳次氏「助字考—宋代以前—」を参照した。

(注12) 例えば、玄奘法師表啓平安初期点と殆ど同時期の訓点の地蔵十輪經元慶七年点にも次の如くある。

〔応〕 一切 声聞独覺乘等 皆〔応〕供養 承事 守護

〔符〕 世界 火災、〔符〕起 五日 出時

〔符〕命終 時 身心不為 憂苦 逼切

〔欲〕

九者為彼守護令〔欲〕終時 得 見 一切 諸 仏 色 像

〔如〕

善男子〔如〕転輪王統 四大洲 皆得 自在

〔未〕

根一機〔未〕熟

〔不〕

互〔不〕相似 新新

〔不〕復 随順 惡友 力行

〔使〕

我当安置 如是 有情 〔使〕營 福業

〔令〕

〔令〕得 安隱 飲食 充足

〔令〕諸 有情 精勤 修学 除 煩惱 病

〔所〕

一切 聰敏 智者、断 常 羅網 〔之〕〔所〕覆蔽

〔者〕

一〔者〕神通 変 現 二〔者〕記 説 変 現 三〔者〕教 誠 変 現

〔亦〕

思 惜 乃 至 夢 中 〔亦〕无 暫 廢

〔所〕

皆 共 親 愛 无 〔所〕猜 慮

西大寺本金光明最勝王經平安初期点にもあることは無論

である。右を補う例を挙げる。

〔雖〕

善男子若有衆生〔雖〕於大乘未能修習

又、小川本願經四分律平安初期点にも類似があるが、その中に次の例も見える。(訓点語と訓点資料九輯四〇〇)

我今習学 医術、何〔当〕有已

師今〔当〕知

(注13)

永久点の「乎」は「カ」が偶々「乎」字の右にあるが、これは「カ〔乎〕」の表記の位置の問題で、本質的には「乎」は不読字であると見られる。理由は、この助字は平安中期以降も、その多くの例に定訓を付したものがなく、次のように、その意味に応じて種々の読添の辞を持っている。

或 歿三於沙丘或崩〔乎〕(三教治道篇保安点)

况乃 剩三当累一願ニ宿歿ニ清ニ衆瘼一徳ニ庶福一者〔乎〕(不空羼索神呪心経寛徳点)

化為ニ仙人ニ〔乎〕(三教治道篇保安点)

在位已五載、何不一幸〔乎〕(白氏文集天永点)

(白氏文集天永点)

これは平安初期における不読字「将」「雖」「前掲」と挨を一にするもので、特定訓が固定せず、漢文における助字の意味に応じて種々の読添辞を持った不読字と見られる。

類似の不読字には、築島博士は「也」「矣」「焉」「哉」「耶」「歟」「諸」を挙げていられる。(平安時代の漢文訓読語についで)

(注14)

平安初期における「雖」「者」「亦」「クノミ而已」の例。

〔雖〕 雖レ得ニ勝菩提ニ而〔不〕捨ニ本願ニ

〔雖〕 雖レ居ニ其国ニ而依レ法住レ常ニ

〔者〕 〔於〕是処座抗レ談者響レ法雷〔而〕

〔者〕 〔令〕護国土一切天竜、藥叉神等の信敬三宝

〔亦〕 亦由ニ榮々燭一火一対倍一景ニ

〔耳〕 如是妙法諸仏如来の時乃説

〔之〕 如ニ

〔之〕 如ニ

〔之〕 如ニ

〔之〕 如ニ

〔之〕 如ニ

〔之〕 如ニ

〔之〕 如ニ

〔之〕 如ニ

〔之〕 如ニ

〔之〕 如ニ

〔之〕 如ニ

〔之〕 如ニ

〔之〕 如ニ

〔之〕 如ニ

〔之〕 如ニ

に多く用いられる傾向に基くものと考えられる（「漢籍訓読語の特徴」参照）。

(注16) 「於」の十輪經の訓は大坪博士によると、「ウ」が疑しい由であるが再調の機を得たいと思う。しかし平安初期にこの訓の存したことは確である。「オキテ」の弥勒上生經贊朱点に「おきて」の訓がある由大坪博士は報せられた（於の訓について）訓点語学会昭37・10・28）が、同朱点に次の如く仮名書の例が見付かったので従いたいと思う。

十法行等（オキテ） 且（オキテ） 助行（オキテ） 上（オキテ） 首（オキテ）

(注17) 平安初期点の「ら」の右例は推読であるが当時の一般の点本では「況」に應ずる際には右の如く用いられるのでそれに従った。

(注18) 永久点の読添語には、今比較の対象となっている巻六以外を調べると、如上の外に「ケリ」「マシ」「ケム」があるが、いずれも用例が稀な上に特定用法に限られる（注6文獻参照）。「ケリ」「マシ」「ケム」は平安初期訓読語としては諸資料に所見のものである。しかし、中期以降の訓点資料では、訓読語的でない語として注意されているものである。

(注19) 例えば、倭漢朗詠集について、中条芳子氏「倭漢朗詠集における対句の読み」（国語学二十輯）がある。筆者が朗詠集の古写本について追試した所では、例外も存し博士家諸家間の訓法上の相違もからまって複雑な事情があるが、一般的傾向は認められる。

[Summary]

On the Historical Change of Japanese Readings of
Chinese Texts in the Heian Period

Yoshinori Kobayashi

The Japanese readings of Chinese texts in the 9th century was based on the free translations, but by the 12th century the literal translations had taken the place of the free ones. For example, in the 9th century the Chinese character 當 was read *subeshi*, *masani...su*, *masani...semu*, *...semu*, etc, etc. ; but in the 12th century 當 had only one fixed reading *masani...beshi*.